

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書V

大坂上道遺跡Ⅲ

2012

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書V

おおさかうえみち
大坂上道遺跡Ⅲ

2012

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 49 号は新潟市と福島県いわき市を結ぶ主要幹線道路で、磐越自動車道を補完するとともに、沿線町村と新潟市周辺を繋ぐ、重要な生活道路です。道路は新潟市から、ほぼ阿賀野川に沿い江戸時代は会津藩の川湊として栄えた津川に至り、そこで川と離れ山路にかかり福島県境の鳥井峠に達します。このうち阿賀町清川から同町谷花間は、急峻な岸壁が阿賀野川に迫り通行規制区間に指定されています。これまで国土交通省によって様々な安全対策工事や改良が行われてきましたが、抜本的な対策は困難であり、阿賀野川の左岸を通る別ルートを建設し、危険を回避することになりました。この阿賀町津川から白川に至る全長 7.5 km 区間の新路線を「一般国道 49 号揚川改良」と呼びます。

新潟県教育委員会では 2005 年の阿賀町大字西にある上野東遺跡と現明嶽遺跡の発掘から始まり、2006 年は大字西の大坂上道遺跡、猿額遺跡。2007 年は阿賀町大字谷花の萩原遺跡を調査しました。2009 年は向大浦・上空野中丸遺跡。2011 年度は大坂上道遺跡の 2 回目の発掘調査を行い、これまで合わせて 7 遺跡、8 度の発掘調査を進めてまいりました。この発掘調査において東蒲原郡では初めて平安時代の住居跡を発見しました。さらに約 5,000 年前（縄文時代前期末）に火山灰を含んだ泥流が津川盆地を襲いましたが、この災害にもかかわらず縄文人は、洪水堆積物の上下で同じ土器形式を使っていることが判明しました。つまり、洪水が収まった後また戻って、たくましく生活していたことの証です。

今回の調査成果を周辺の遺跡のあり方とも合わせて検討し、津川地区の縄文時代の暮らしの一部を解明したいと思います。この報告書が地域の歴史を理解する一助になることを期待します。最後にこの発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただいた阿賀町教育委員会、並びに地元の方々。また、発掘調査から本報告書の作成に至るまで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所、同津川出張所に対して厚くお礼を申し上げます。

平成 24 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西地内に所在する大坂上道遺跡の3回目の発掘調査記録である。
- 2 本調査は、一般国道49号掲川改良の建設に伴い、新潟県が国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から受託したものである。発掘調査は、新潟県教育委員会（以下、県教委という）が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社古田組に委託し、2011年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、2011年度に埋文事業団が県教委から受託しこれに当たった。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は、大坂上道遺跡の略記号「11 大サカ」に出土地点、遺構名、層位等を併記した。
- 6 今回実施した発掘調査は、一般国道49号掲川改良の建設にかかわり2006年度に発掘調査した大坂上道遺跡西区の未調査区域320m²（2面）である
- 7 本書の図中で示す方位は、すべて座標北である。
- 8 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文・観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 9 本文中の引用文献は、著者及び発行年（西暦）を〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 観察表は、上層（縄文時代中期）及び下層（縄文時代前期）出土の土器・土製品、石器・石製品について掲載した。
- 11 本書の執筆は、田海義正（埋文事業団 調査課長代理）の指導のもと、藤田登（株式会社古田組 遺跡調査研究室）が当たり、編集は藤田が担当した。執筆分担は、第Ⅰ章1・第Ⅱ章1 田海義正、第Ⅰ章2・3・第Ⅱ章2・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章 藤田である。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる（敬称略　五十音順）
　　遠藤 佐　　高橋 保　　宮尾 亨　　村上章久　　阿賀町教育委員会　　大字西集落

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
A 本発掘調査（上層・下層）	1
3 調査体制	2
A 本発掘調査	2
B 整理作業	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
1 遺跡の位置と周辺遺跡	4
A 磐越自動車道・国道49号掲川改良事業に関連した遺跡調査	4
第Ⅲ章 調査の概要	8
1 遺跡の現況	8
2 グリッドの設定	8
3 基本層序	9
第Ⅳ章 遺構	10
1 下層の遺構（縄文時代前期後葉以前）	10
A 概要	10
B 遺構各説	11
2 上層の遺構（縄文時代中期前葉）	14
A 概要	14
B 遺構各説	14
第Ⅴ章 遺物	16
1 概要	16
2 遺物各説	16
A 下層出土土器	16
B 上層出土土器	17
C 下層出土石器	17
D 上層出土石器	18

第VI章 まとめ

1 下層（縄文時代前期後葉）の遺構・遺物について	20
A 遺構	20
B 遺物	21
2 上層（縄文時代中期前葉）の遺構・遺物について	21
A 遺構	21
B 遺物	22
《要約》	23
《引用・参考文献》	24
《観察表》	25

表 目 次

第1表 阿賀町 磐越自動車道・国道49号掲川改良関係の試掘確認調査の履歴	3
--------------------------------------	---

挿図目次

第1図 本発掘調査位置図	3
第2図 遺跡位置図	4
第3図 周辺の遺跡分布図	6
第4図 グリッド設定図	8
第5図 基本層序模式図	9
第6図 調査区層序柱状図	9
第7図 遺構検出面模式図	10
第8図 石器出土分布図(上・下層)	19

図版目次

[図面図版]

図版1 2006・2011年度調査区(下層)	図版10 下層 縄文石器(2)
図版2 2006・2011年度調査区(上層)	図版11 下層 縄文石器(3)
図版3 遺構配置図1(下層)	図版12 遺構配置図2(上層)
図版4 遺構別図(1)下層 積穴住居	図版13 遺構別図(1)上層 積穴住居・土坑・ピット
図版5 遺構別図(2)下層 積穴住居	図版14 遺構別図(2)上層 振立柱遺物・ピット
図版6 遺構別図(3)下層 積穴住居・積穴様遺構	図版15 遺構別図(3)上層 ピット・焼土分布図
図版7 遺構別図(4)下層 振立柱遺物・ピット・集石遺構	図版16 上層 縄文土器・石器(1)
図版8 遺構別図(5)下層 上段 ピット・下段 集石遺構分布図	図版17 上層 縄文石器(2)
図版9 下層 縄文土器・石器(1)	図版18 上層 縄文石器(3)
	図版19 上層 縄文石製品
	図版20 遺跡周辺の調査区域図

[写真図版]

図版21 遺跡遠景 上段:南上空から 下段:東上空から	図版26 下層遺構(4) 土坑・ピット・フレイク集中・集石遺構
図版22 上段:下層完掘(真上から) 下段:三角形岩版(上層出土)	図版27 上層遺構(1) 振立柱建物・積穴住居・土坑
図版23 下層遺構(1) 遠景・調査前・基本層序 ・振立柱建物	図版28 上層遺構(2) 土坑・ピット・遺物出土状況・焼土・完掘
図版24 下層遺構(2) 積穴住居	図版29 縄文土器・石器1 (下層)
図版25 下層遺構(3) 積穴住居・積穴様遺構・集石遺構	図版30 縄文土器・石器2 (上層)
	図版31 縄文石製品 (上層)

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道 49 号揚川改良事業は、阿賀町津川から同町白川に至る全長 7.5km の道路である。阿賀町清川から本尊岩・谷花地区に至る区間は、急峻な岩壁斜面が阿賀野川に迫る。この山裾を JR 鰐越西線と国道 49 号が併走している。したがって国道の線形が悪く、幅員が狭いことに加え、度重なる土砂災害、岩石崩落及び雪崩の危険に晒され、通行規制区間（連続雨量 150mm）に指定されている。国土交通省はこれまで対策工事や監視体制の強化に努めてきたが、抜本的な対策は困難であるため、対岸の阿賀野川左岸を通る別ルートを建設し、危険を回避することとした。全く新規に建設される道路であるが、これまで続けてきた改良工事の名を冠して、揚川改良事業と呼んでいる。

大坂上道遺跡は、鰐越自動車道建設関連の試掘調査で 1990（平成 2）年 10 月に発見した。国道 49 号揚川改良事業に伴う調査は、2003 年に始まり 3 度の試掘確認調査を経て、遺跡範囲の拡大を把握した（図版 20）。本発掘調査は 2006（平成 18）年 4 月から 8 月まで上層 2,378m²、下層 705m²を対象に行い、绳文時代と平安時代の遺構と遺物を検出したが、今回の調査対象地の 320m²の土地買収が終わっていないため、未着手となっていた（第 1 図）。残り部分は、県教委から埋文事業団に上下層合わせた 670m²の発掘調査の依頼があり（平成 23 年 3 月 23 日付け教文第 1488 号の 2）、2011 年 5 月 9 日から 6 月末までの予定で発掘調査に入った。

2 調査の経過

A 本発掘調査（上層・下層）

5 月 9 日に調査を開始し、バックホーで表土の除去作業を行った。表土除去は、篭根や立木根等が絡む上面をバックホーで薄く剥ぎ、残層を上層文化層の II 層上面まで人力で掘削した。2006 年度調査区の西壁断面で基本層序を観察し、上層と下層の 2 面を認識した。

5 月 12 日から遺構検出のための精査を行った。豊穴住居・配石を伴う土坑・小ピット・焼土・性格不明遺構等を検出した。16 日から遺構掘削を開始し、併行して上層上面の地形測量を行った。OW20 区の配石を伴う土坑周辺で出土した石製品が岩版（2 点）であると認識し、さらに調査区東側（OW19 区）でも 1 点出土した。2006 年度調査でも 1 点出土していることを確認した。24 日、遺構の平面測量を行い、25 日上層の遺構掘削が終了し、完掘写真撮影のための精査を行った。26 日、ラジコンヘリによる空撮を行い、終了後ただちに間層（鹿瀬輕石質砂層）の掘削を人力により開始した。間層掘削は、IV 層及び V 層上面までとし、下層遺構検出面の精査を行うとともに上面の地形測量を行い、遺構調査を開始した。

5 月 31 日、下層遺構の掘削を開始した。豊穴住居・土坑・ピット・集石遺構・焼土を検出し、小ピットの掘削を先行しながら、集石遺構→土坑→豊穴住居→焼土の順で作業を進めた。下層は層厚が薄いため、出土遺物は遺構内・外ともに番号を付し、測量して取り上げた。

6 月 20 日、ラジコンヘリにより下層遺構完掘写真撮影を行い、遺構平面測量を開始した。22 日、完

2 調査の経過

掘遺構の個別写真撮影及び平面測量を終了し、県教委から現地調査の終了確認を得た。

6月30日、国土交通省新潟国道事務所へ現地を引き渡した。

3 調査体制

A 本発掘調査

調査期間 2011(平成23)年5月9日～6月22日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤克己)

調査受託 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 木村正昭(専務理事・事務局長) 今井 直(総務課長)

庶 務 伊藤 忍(総務課班長)

總 括 北村 亮(調査課長)

指 導 田海義正(調査課長代理)

調査組織 株式会社古田組

現場代理人 竹内一喜(遺跡調査研究室 管理長)

調査担当 藤田 登(株式会社古田組 遺跡調査研究室 主任調査員)

調査員 建部真也(遺跡調査研究室 調査員)

B 整理作業

出土遺物の洗浄は現地調査と並行して行ったが、7月から株式会社古田組遺跡調査研究室で、図面・写真の整理、出土遺物の注記・接合・復元・実測・拓本及び写真撮影を行った。

整理期間 2011年7月1日～2012年3月31日

管 理 木村正昭(財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長)

今井 直(同 総務課長)

庶 務 伊藤 忍(同 班 長)

總 括 北村 亮(同 調査課長)

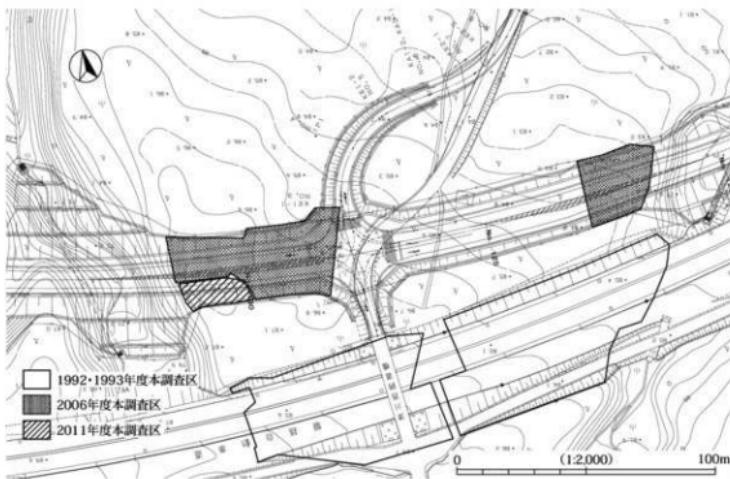
指 導 田海義正(同 課長代理)

調査組織 株式会社古田組

調査担当 藤田 登(株式会社古田組 遺跡調査研究室)

整理補助員 安達鉄雄 風間梢 黒岩拓也 小池美奈子 宮原正樹 渡部明美

	5	6	7	8	9	10	11	12	2012年	1	2	3
洗浄・注記			→									
接合・復元					→							
実測・拓本						→						
トレース						→						
遺物写真撮影												
遺構図面整理						→						
図版作成							→					
編集・校正								→				
印刷・刊行									→			



第1図 本発掘調査位置図

磐越自動車道							
調査年	地区(工事)名	調査対象面積m ²	試掘面積m ²	本發掘面積m ²	内 容	道 路 名 道路No	備 考
① 1990年	大字西	5,300	232	2,945	縄文前・中期	大坂上道 33	
		7,450	100	—			
		5,300	233	2,945	縄文前・中期	大坂上道 33	
⑤ 1991年	大字津川	75,480	1,070	—			
① 1991年	大字西	4,740	140	5,755	縄文前・中期	大坂上道 33	90年の保留分を含む
		5,100	130	3,000	縄文前・中期	猿 頭 36	
		7,200	360	3,200	縄文前・中期	中 樅 35	
⑥ 1992年	大字津川	38,600	1,070	—			
		17,600	660	—			
		27,900	1,019	—			
		8,100	440	—			
		合 計	202,770	5,454	17,845		

国道49号鶴川改良							
調査年	地区(工事)名	調査対象面積m ²	試掘面積m ²	本發掘面積m ²	内 容	道 路 名 道路No	備 考
⑦ 2001年	大字西 工事用道路	7,000	865	—	縄文後期	六角原 3	
⑧ 2003年	赤岩町道	1,835	273	273	縄文後期	上 野 61	
⑨	赤岩橋橋台	3,000	77	—			
⑩	大坂上道遺跡隣接	6,340	192	2,960	縄文中・後期	大坂上道 33	
⑪	猿頭遺跡隣接	1,500	91	3,000	縄文前・後期	猿 頭 36	
⑫ 2004年	大字西字堤明巣	1,400	80	750	縄文中・後期	堤明巣 62	
⑬	大字西字中郷・上野	9,760	324	1,000	縄文前期	上野東 63	
⑭					縄文後・晩期	中郷北 64	周知化のみ
⑮ 2005年	大字西字頭無	9,200	278	—			
⑯	猿頭遺跡隣接	1,265	38	180	猿 頭 36		
⑰ 2006年	大字津川	19,000	169	保留	縄文中期	(向大浦)	
⑱	大坂上道遺跡隣接	770	44	—			
⑲ 2007年	大字津川	21,050	726	4,000	縄文中期・平安	向大浦 218	
⑳	大字芦沢	9,576	264	—			
㉑ 2008年	工業団地付近	3,136	243	500	縄文・近世	上空野中丸 219	
㉒	文化福祉会館裏	13,444	272	—			
㉓ 2009年	大字西字中郷	1,110	72	—		中郷北 64	本調査不要
㉔	大坂上道遺跡進入路	690	89	—			
㉕	大字津川診療所近く	5,850	220	—			
㉖	合 計	115,926	4,317	12,663			

※丸付数字は昭和20の調査地点を示す

第1表 阿賀町 磐越自動車道・国道49号鶴川改良関係の試掘確認調査の履歴

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺遺跡

阿賀町は、新潟県の北東部に位置し、福島県と県境を接する山間の町である（第2図）。江戸時代は会津藩領に含まれ、河口の新潟と結ぶ阿賀野川に川湊が整備され、荷の往来とともに繁栄した。

遺跡のある津川地区は、町の中央を阿賀野川とその支流の常浪川が西流する。町の中心部は平坦だが、周囲は山地に囲まれており、北に飯豊山塊、北西に越後山脈が南北に走り、山に囲まれたこの地域を津川盆地と呼ぶ。河岸段丘は阿賀野川左岸に発達しており、ここを磐越自動車道や国道49号揚川改良事業の路線が通り、遺跡が相次いで発見されることとなった。なお、地理的・歴史的環境については、既刊報告書第186集を参照。

A 磐越自動車道・国道49号揚川改良事業に関連した遺跡調査

磐越自動車建設に関連して、旧津川町地内では大字西で1990（平成2）年10月から試掘調査を開始した。この調査で大坂上道遺跡、猿額遺跡、中棚遺跡を新たに発見し（第3図・図版20）、1992年から本発掘調査を実施した。国道49号揚川改良事業に伴う遺跡の試掘確認調査は、2001年の六角原遺跡の確認調査から始まり、2009年まで用地の取得状況に合わせて行った。この2つの道路関係の試掘確認調査は



第2図 遺跡位置図
（国土地理院発行 平成11年「津川」「野沢」平成9年「御神楽岳」平成元年「大日岳」1:50,000原図）

合わせて 29 回実施した。試掘確認調査対象面積 318.696m²に対し、9.771m²を発掘調査した。その結果、新たに 9 遺跡を発見し、周知遺跡 1か所の範囲拡大を把握した(図版 20 折り込み)。本発掘調査が必要となつた面積は 30.508m²である(その後の本発掘調査で調査面積に変更が生じている)。第 3 図に『埋蔵文化財包蔵地調査カード』○、発掘調査報告書△、報告書・事業団年報・調査カード□を基に遺跡範囲を示した。

次に、これまでの道路事業に関連した県教委の発掘調査を概観する。

大坂上道遺跡 阿賀野川左岸の河岸段丘にある。河床から比高約 40 m、両側を沢に刻まれた幅約 180 m、標高約 84 m から 88 m の平坦な土地である。戦後は畑に開墾されたが、昭和 30 年代以降は杉が植林されてきた。磐越自動車道関連で 1992 年に約 4,200m²、1993 年に約 4,500m²の発掘調査を行った〔滝沢ほか 1995〕。そこでは厚さ 10cm から 25cm の黄褐色シルト層(福島県金山町沼沢火山供給の火山灰二次堆積土／鹿瀬軽石質砂層と呼ぶ)の上下に遺物包含層があった。上層からは土坑 7 基、フ拉斯コ状土坑 2 基、焼土坑 2 基、集石 2 基を検出し、縄文時代中期前葉の阿玉台式、五領ヶ台式などの関東系の文様を持つ土器のほか、北陸系の土器も出土した。また、縄文時代晚期と平安時代の土坑も検出した。下層の明灰粘土の遺物包含層からは、縄文時代前期末葉以前の遺構を検出した。遺構は土坑 8 基、焼土坑 2 基、集石土坑 1 基などであるが、土器は少なく大木 6 式期の 1 点のみであった。この発掘調査で鹿瀬軽石質砂層の下層にも縄文時代前期末葉以前の遺構や遺物が包含されていることが明確となった。

掲川改良事業に伴う一度目の発掘調査は、2006 年 4 月から 8 月までを行い、上層 2,378m²、下層 705m²の発掘を実施した〔桐原ほか 2008〕。上層からは平安時代(9 世紀後半から 10 世紀初頭)の竪穴住居 1 軒、掘立柱建物 1 棟のほか、阿賀町では初例となる腰帯に装う石鈎巡方が出土した。縄文時代の遺構では、土坑の片側に 2 個体分の中期前葉の土器片が寄せ置いた状態で出土したことから、裴被葬を示すものと考えられる。土偶 1 点と三角形岩版も 1 点出土した。

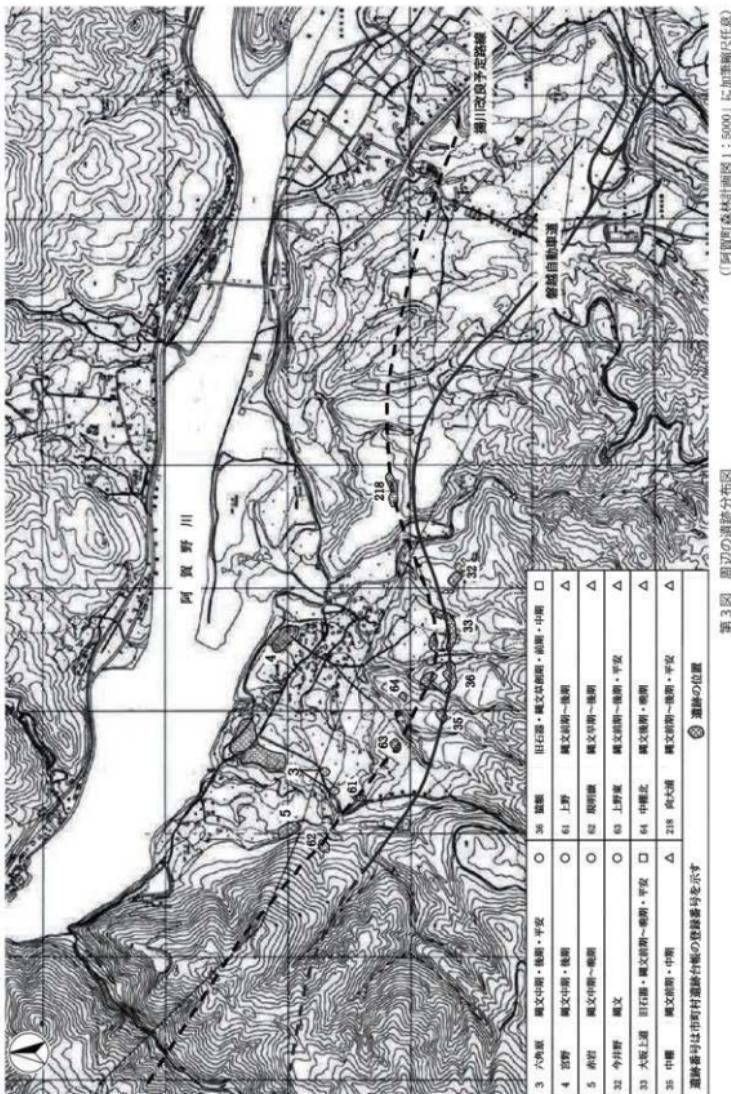
磐越遺跡 磐越自動車道関連で 1992 年、1993 年に合わせて 3,200m²の発掘調査を行った〔滝沢ほか 1995〕。遺跡は標高 92 m から 99 m の上段と標高 84 m から 88 m の下段に分けられる。上段には鹿瀬軽石質砂層の堆積が及んでいない。旧石器時代の彫刻刀形石器 1 点、石刃 1 点、縄文時代草創期の尖頭器 4 点など注目すべき石器が出土した。長さ 14.4cm の神子柴型尖頭器の優品も 1 点含まれる。下段では鹿瀬軽石質砂層を挟んで上下で縄文時代前期末葉の大木 6 式土器が出土した。この出土状況は鹿瀬軽石質砂層の堆積時期を考古資料の上から確定する手懸りとなった。

掲川改良事業に伴う発掘調査は、2006 年 8 月から 12 月に上下層合わせて 3,360m²を対象に実施した〔桐原ほか 2008〕。上層の遺構は中期初頭のビット 2 基のみであったが、鹿瀬軽石質砂層が最大 60cm も堆積したその下層からは、縄文時代前期末葉以前の土坑 6 基、炭化物集中 1 基、土器集中地点 1 か所を検出した。土器は縄文時代前期前葉のものが 3 点破片で出土したほかは、前期末葉が主体を占める。

中棚遺跡 磐越自動車道関連で 1992 年に 2,300m²の発掘調査を行った〔滝沢ほか 1995〕。遺跡が立地する段丘の幅は約 110 m、標高約 95 m から 99 m を測る。土坑 4 基、フ拉斯コ状土坑 1 基、集石土坑 1 基を検出した。縄文時代前期末葉～中期初頭を中心とした遺跡である。土器に比べて石器が多く、4 号土坑からは同一母岩(頁岩)の大型剥片が 10 点まとめて出土した。石器製作工程を考える上で興味深い資料である。

六角原遺跡 国道 49 号掲川改良事業にかかる工事用道路に関連して 2001 年に確認調査を実施した〔渡辺 2002〕。遺跡は西集落の北西、阿賀野川に臨む津川面と呼ぶ河岸段丘の標高約 63 m から 71 m にある。鹿瀬軽石質砂層の上部の黒褐色土から縄文時代のビットや風倒木痕を検出したが、遺構は少ない。

1 遺跡の位置と周辺遺跡



第3図 周辺の遺跡分布図

後期初頭の三十幅場式土器や板状打製石器1点、玉髓製不定形石器2点などが出土した。ここでは約1mの鹿瀬軽石質砂層の下位に黒褐色粘土があるが縄文前期以前の遺跡は確認できなかった。

うえの 上野東遺跡 国道49号掲川改良事業で2005年に1,410m²を発掘調査した〔高橋ほか2006〕。立地する段丘は標高約92mから94mを測り、東側には沢がある。津川盆地では最も高い標高94mで鹿瀬軽石質砂層を検出した。縄文時代前期後葉から末葉の竪穴住居1軒、土坑6基、焼土7基などを検出した。縄文時代の遺物は大木5式、6式古段階の土器が多いが、東関東を中心を持つ浮島Ⅲ式や興津Ⅰ式土器も出土した。石器では、押出型ポイントが1点出土し、蛇紋岩製の磨製石斧の出土などは、各地との交流を窺わせる。東蒲原地域では初例となる、平安時代の竪穴住居を1軒検出した。住居及び周辺から9世紀後半から10世紀初頭の土師器と須恵器が出土した。

あらたま 現明郷遺跡 国道49号掲川改良事業で2005年に上下2層合せて1,270m²を発掘調査した〔高橋ほか2006〕。遺跡は津川盆地の阿賀野川左岸にある河岸段丘の中でも最西端の赤岩トンネル坑口付近にある。東下を流れる赤岩川と山際の沢に刻まれた幅約20mの細尾根状の段丘上にある。鹿瀬軽石質砂層は上下の縄文時代層を分けているが、地形の傾きで厚さ60cmから堆積しないところまであった。下層から縄文時代前期後葉から末葉の焼土1基、集石1基、遺物集中地点4か所を検出した。一時的、季節的な利用と推定できる。縄文土器は東北系の大木5b式から大木6式新段階に加え、東関東系の浮島式や興津式、北陸系の鍋屋町式も出土した。上層では縄文時代後期中葉の竪穴住居3軒、土坑10基、焼土1基、集石1基などが出土している。土器は関東系・東北系それぞれの加曾利B2式に近似する。土偶やミニチュア土器、スタンプ形土製品、石棒などの精神生活に関わる遺物が出土した。

かみの 上空野中丸遺跡 国道49号掲川改良事業で2009年に500m²を発掘調査した〔小村ほか2011〕。標高約97mの河岸段丘西縁にあり、縄文時代の石器や中世陶器などが出土したが、試掘で予想された縄文時代の遺構は検出できず、近世以降の土坑4基、溝3条、ピットを検出した。

こうおとう 向大浦遺跡 国道49号掲川改良で2009年に上下層合せて8,000m²を発掘調査した〔金内ほか2011〕。河岸段丘面の高さは、検出標高約79mから81mを測る。鹿瀬軽石質砂層の下部は、縄文時代以前の竪穴12基、土坑2基を検出した。前期以前は獵場として利用されていたものと見られる。遺物は東北系の大木5b式土器が出土した。上層からは縄文時代中期前葉、平安時代の遺構と遺物を検出した。中期前葉はピット2基のみで、遺物量に比べて遺構が少ない。中期の遺跡の中心は調査区北側の段丘先端部と推測される。平安時代の遺構は、竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、土坑7基、焼土1基などである。土器の年代は9世紀後半から10世紀初頭である。文字か記号かは判別できないが東蒲原郡内で初の墨書き土器が1点出土した。

これらの調査から阿賀野川左岸の標高80mから90m前後の河岸段丘は、後期旧石器時代から人の痕跡が見える。縄文時代前期後半には小規模な集落が営まれ、中期前葉まで続く。中期中葉頃から遺構が少ない傾向になる。後期は細尾根に竪穴住居が造られた現明郷遺跡を除き、全体としては認められなくなる。中期以降は一段低い段丘（津川面）である現在の集落付近に遺跡の主体が移るものと考えられる。平安時代の竪穴住居や掘立柱建物も東蒲原郡内において初めて発見された。いずれも土器から見ると9世紀後半から10世紀初頭に営まれたと考えられる。古代越後の他地域の開拓とも共通する在り方が読み取れる。

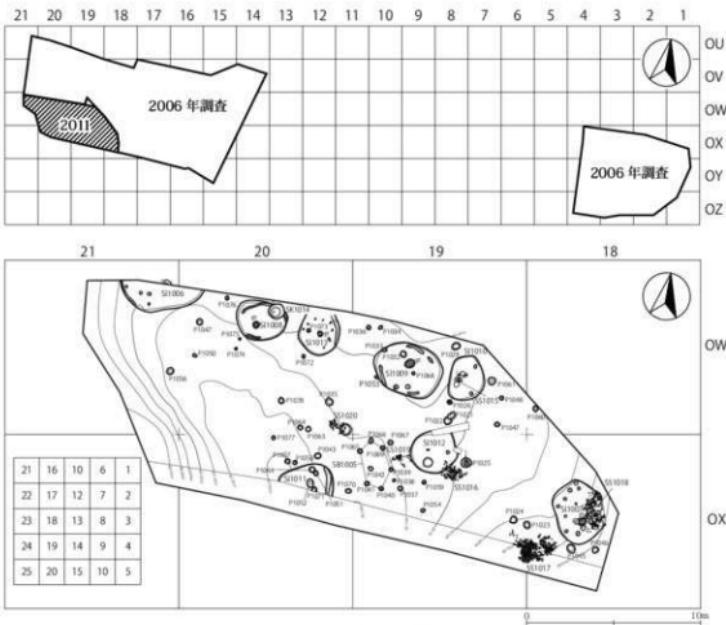
第III章 調査の概要

1 遺跡の現況

大坂上道遺跡の所在する「津川盆地」は、新生代堆積盆地である新潟堆積盆地の東縁に位置している。本発掘調査区は、2006年度調査した西区の南西隅に当たる未調査区域である。同遺跡の立地環境については大坂上道遺跡II〔桐原ほか2008〕、萩原遺跡〔小川ほか2008〕で詳細に報告されている。

2 グリッドの設定

本発掘調査区は、前述のとおり大坂上道遺跡II〔前掲〕の未調査区域であることから、前調査時の設定によるグリッドを基にした。よって、基準点は、磐越自動車道の道路法線TP3-I ($X=186692.861, Y=81990.994$) と OY18区の杭 ($X=186690.219, Y=82020.143$) に基づき設定した。大グリッドと小グリッドの呼称は同様の組み合わせで表記した。



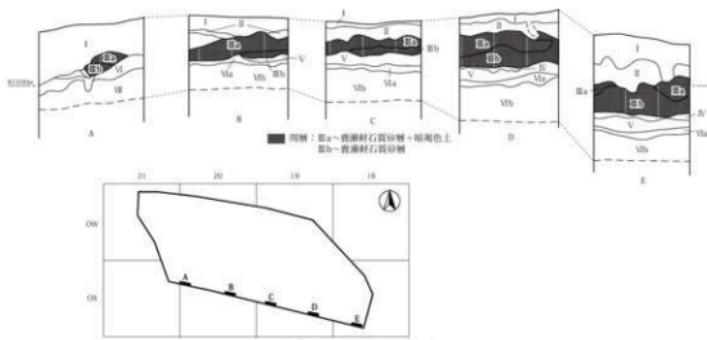
第4図 グリッド設定図

3 基本層序

本掘調査区の基本層序は、大坂上道遺跡IIのものに準じて設定しているが、III層以下の分層については今調査で独自の細分を行った。以下、I層～VI b層の説明とする（図版23）。

- | | | |
|--------|--|------------------------|
| I層 | 表土：層厚5～15cmの黒褐色土(10YR2/3) | I |
| | 未分解腐植土が主体で、粘性・しまりなし。 | |
| II層 | 暗褐色土：層厚10～15cm(10YR3/4)
粘性ややあるがしまり弱い。縄文時代中期～古代の遺物包含層。 | II
(上層：縄文時代中期前葉～古代) |
| III a層 | にぶい黄褐色土：層厚20～30cm(10YR5/4)
砂質で粘性・しまりが弱く、III b層への漸移層である。(鹿瀬軽石質砂層+暗褐色土) | IIIa |
| III b層 | 黄褐色（黄色）砂質土：層厚20～35cm
(10YR6/6)
鹿瀬軽石砂層（沼沢火山灰の2次堆積層）
粘性弱いがしまりっている。(無遺物層) | IIIb |
| IV層 | 褐灰色粘質土：層厚5～10cm(7.5YR6/1)
黒褐色土と黄灰色粘土粒の混合肥土
粘性・しまりあり。部分的に堆積が薄くなる。V層より黄色砂粒が多く色調は明るい。 | IV |
| V層 | 暗褐色灰色粘質土：層厚10～15cm(10YR4/1)
粘性・しまりあり。細石粒を若干含む。縄文時代前期の遺物包含層。 | V
(下層：縄文時代前期後葉) |
| VI a層 | 黄褐色灰色粘質土：層厚5～10cm(10YR6/2)
粘性・しまりあり。2～3cm大の小礫を含む。VI b層への漸移層。この上面は遺構検出面 | Vla |
| VI b層 | 淡黄色粘質土：(2.5Y8/4)
粘性・しまり強い。5cm大の角礫を含む。地山 | VIb |

第5図 基本層序模式図



第6図 基本層序柱状図

第IV章 遺構

本遺跡周辺における縄文時代（前期以降）の遺跡調査は、近年では磐越自動車道・常浪川ダム・一般国道49号掲川改良事業等、近年の開発行為により多くの遺跡が調査され、貴重な資料が得られている。そうした中で、縄文時代前期～中期あるいは後期の遺跡では、沼沢火山噴出物の二次堆積層とされる鹿瀬軽石質砂層を間層とした上下二枚の包含層が確認されている。前期（下層）の調査例では阿賀野川支流の常浪川左岸に所在する北野遺跡〔高橋ほか2005〕等が代表的で、前期後葉～末葉の集落跡（環状の拠点集落）が厚い鹿瀬軽石質砂層に覆われ完全パックの状態で検出された。中期（上層）では、キンカ杉遺跡〔遠藤2006〕、屋敷島遺跡〔中島ほか2006〕等が、拠点的な大規模集落の可能性を示唆している。

今回の調査では、下層から前期後葉以前の遺構（竪穴住居・竪穴様遺構・掘立柱建物・土坑・小ピット）・遺物（土器、石器）、上層から中期前葉の遺構（竪穴住居・土坑・小ピット・焼土）・遺物（土器、石器、石製品）を検出した。下層における遺構構築面はIV層（褐灰色粘質土）上面ないしV層（暗褐色粘質土）中と考えられるが、いずれも層厚が薄く平面精査による検出は困難であった。又、上層もII層（暗褐色土）の包含層が薄いことから、上面での検出は困難であった。したがって遺構検出面は、下層がV層ないしVI層上面、上層はIIIa層ないしIIIb層上面である。（間層のIIIa層はIIIb層の鹿瀬軽石質砂層上に再堆積したと考えられ、暗褐色とIIIb層の混合土である。つまり、軽石質砂層が段丘上に堆積した後も数回にわたり粗粒物質を含んだ土層が堆積していたと推測される。又、IIIa層は調査区中央部では極めて薄い）。下層遺構検出は、間層のIIIa+b層（層厚40～65cm）を手掘り作業で行い、IV層上面（V層の漸移層）で最初の精査で遺構プランの確認を行い、明確に検出できない区域については、V層・VI層上面で更に精査し各遺構を検出した。上層は、I層（表土）を重機で掘削し、II層上面を人力で掘り下げ、主にIIIa層で遺構の検出を行った。

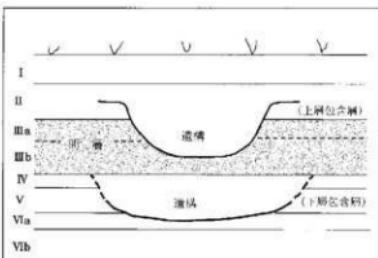
各遺構の様相は、遺構覆土中及び包含層出土の遺物が極めて少ないとから、遺構構築時期等の詳細は不明である。そこで本稿では、二枚の検出層位における所属時期を、下層は前期後葉以前に所属する遺構、上層は中期前葉に所属する遺構という認識で大別している。

以下、下層・上層別に遺構・遺物の概要を述べる。

1 下層の遺構（縄文時代前期後葉以前）

A 概要

小規模な調査区（320m²）であった本調査では、IV・V層（大木6式土器期に堆積したとされる鹿瀬軽石質砂層下）で、掘立柱建物1棟、竪穴住居6軒、土坑1基、竪穴様遺構2基、ピット53基、礫集中区6か所を検出した。なお、竪穴様遺構は、焼土（燒）などを未検出のため、住居と認識できないものを一括した。各遺構の説明に当たっての略号・番号は、前掲の大



第7図 遺構検出面模式図

坂上道遺跡IIに準じるもので、下層・上層の遺構番号は通し番号をそのまま引き継ぎ付した。したがって、本報告書で記載する観察表の記載項目も共通項目とした。

B 遺構各説

(1) 掘立柱建物(図版3・7・23)

調査区内に散在するピットの中で、SI1010(OX20区)とSI1002(OX19区)の中間で検出した。か跡(燒土)が検出されていないため、ピットの規模、覆土、深さなどの特徴が類似する点から配列の規則性を見出し、現地で検討したものである。

SB1005(図版3・7・23)

OX19区に位置する。標高値87.1mである。平面形は六角形を呈するが柱間は均一ではない。主軸となる長軸は2.84m、短軸は1.39mを測る。主軸方向はN-12°-Wを示す。柱穴は、平面形が円形ないし楕円形で、長径20~35cm、短径21~28cm、深さ10~22cmを測る。覆土はP1040・1041は、黒褐色粘質土だが他はいずれも暗褐色粘質土である。地面直上では、貼床・か跡・焼土などの痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

(2) 穫穴住居・竪穴様遺構(図版1・3~6・24・25)

下層の遺構検出面であるV層ないしVI層は、南側から北及び北西側へ緩傾斜(標高87.3m~86.6m)する。西側(OX・OX21区)は台地の縁辺部で南西の沢へ急傾斜となる。竪穴住居・竪穴様遺構の分布は、標高約87mの等高線上に6軒が並び、東西に弧状に広がる(図版3)。竪穴住居は主にV層(下層包含層)上面で検出した。遺物包含層の褐色灰土中でも竪穴住居などの遺構は、より濃色の落ち込みとして検出できた。竪穴住居及び竪穴様遺構は掘り込みも浅く、SI1006の石器3点以外は出土遺物が皆無であることから、確証はないが、か跡(燒土)、周溝、壁沿のピット列などから6軒を竪穴住居と認定した。

また、所属時期については、調査区内で前期後葉の土器がわずかに出土しているが、遺構内で鹿瀬輕石質砂層の落ち込みが確認されないことなどから、縄文時代前期後葉以前としておく。ただし、各遺構が同時期に存在していたかは断定できない。

SI1006(図版3・4・24)

OW20・21区に位置し、標高値86.9~87.1mである。竪穴の北側半分は2006年度調査区になる。

現存の平面形はおむね楕円形を呈している。長軸4.86m、短軸1.73m(現存)、検出面からの深さは22cmを測る。長軸方向は、おむね東西を示す。覆土は1層の暗褐色粘質土と2層のにぶい黄褐色土に細分される。床面は掘形底面である。平坦で全体的に硬くしまっているが、西側へわずかに傾斜している。壁面はやや傾斜して立ち上がり、掘り込み面はIV層上面である。周溝は西側壁沿いで検出されたが主柱穴は見られず、西側床面に3基の小ピットが検出されたのみである。ピットの平面形はやや楕円形を呈し、深さは8~9cmを測る。

遺物は、覆土中から箇状石器(図版10~26)・磨石(図版11~32)・石皿(図版11~36)等の礫石器が出土したが土器の出土は見られなかった。箇状石器は南西部の壁寄り、磨石・石皿はほぼ中央から出土した。

SI1007(図版3・4・24)

OX18区に位置し、標高値86.6~86.8mである。平面形は不整の楕円形を呈しているが、東壁側の一部は集石遺構と重複関係にあり欠損している。長軸3.30m、短軸3.15m、検出面からの深さは33cm

を測る。長軸方向はN-10°-Wを示す。覆土は、1・2層の暗褐色粘質土と3層のにぶい黄褐色土に細分される。床面は、凹凸が著しいが全体的に硬くしまっている。壁面は、北側と西側はやや傾斜して立ち上がり、東側は集石遺構により不明である。検出面はV層上面である。地床炉は竪穴中央の南寄りに位置している。炉の規模は、長径53cm、短径45cm、焼土及び焼土化した部分の厚さは8cmを測る。竪穴内部に点在するピットを14基検出したが、主柱穴と思われるピットはない。平面形はいずれもほぼ梢円形を呈している。

P3～5は深さ18～23cmを測るもので、ほかは10cm未満のものである。覆土は灰黄褐色粘質土と明黄褐色粘質土に細分され、主体はV層とVI層の混合土である。これらのピットは、床面検出時に確認したものだが、竪穴住居との関係については不明である。遺物は出土していない。

SI1008・SK1014（図版3・5・24）

OW20区に位置し、標高値87.0～87.1mである。竪穴平面形は不整の梢円形を呈しており、北東壁でSK1014と重複し、これに切られている。長軸2.93m、短軸2.30m、検出面からの深さは25cmを測る。長軸方向はN-80°-Eを示す。検出面はV層上面である。覆土は、1層の黒褐色粘質土、2層のにぶい黄褐色粘質土、3層の灰黄褐色粘質土に細分される。床面はやや固くしまっている。壁面はゆるい傾斜で立ち上がる。周溝は北壁沿いでは半周しているが、南壁沿いでは長さ約80cmを検出した。幅10cm、深さ8cmを測る。覆土は灰黄褐色粘質土である。地床炉は南西寄りに位置している。炉の規模は、長径40cm、短径38cm、焼土及び焼土化した部分の厚さは6cmを測る。

SK1014は、竪穴検出時に確認したもので、土層断面でSI1008の覆土を切って構築していることから、竪穴住居（SI1008）廃棄後の所産と考えられる。平面形は梢円形を呈し、長軸1.09m、短軸0.83m、検出面（SI1008 覆土1層上面）からの深さは37cmを測る。長軸方向はN-70°-Eを示す。覆土は、1層の黒褐色土、2層のにぶい黄褐色粘質土、3層の灰黄褐色砂質土に細分される。全体的に小礫が含まれ粘性が強くしまっており、埋め戻しの可能性が高い。断面形はスリバチ状を呈す。両遺構ともに遺物は出土していない。

SI1009（図版3・5・25）

OW19区に位置する。標高値は86.9～87.0mである。平面形は不整の梢円形を呈している。長軸4.00m、短軸2.92m、検出面からの深さは25cmを測る。長軸方向はN-70°-Wを示す。検出面はV層上面である。覆土は、1層の暗褐色粘質土、2・3層のにぶい黄褐色粘質土に細分される。床面は掘形底面である。平坦でやや固くしまっている。壁面は緩い傾斜で立ち上がる。周溝は北壁沿いと南壁沿いに部分的に検出した。最長のものは長さ1.25m、幅15cm、深さ4cmを測る。覆土は灰黄褐色粘質土である。地床炉は床面中央やや北寄りに位置している。炉の規模は、長径60cm、短径50cm、焼土及び焼土化した部分の厚さ5cmを測る。

ピットは、内部に4基と西壁際に1基検出したが、主柱穴と思われるピットはない。平面形は、不整円形か梢円形を呈し、長径19～35cm、短径16～32cm、深さ6～11cmを測る。覆土は灰黄褐色粘質土か1層の暗褐色粘質土、2・3層のにぶい黄褐色粘質土である。これらのピットは、床面検出時に確認したものだが、竪穴住居との関係は不明である。遺物は出土していない。

SI1010（図版3・6・25）

OX20区に位置する。標高値は87.2～87.3mである。南側半分が調査区外にある。平面形は梢円形と推測される。残存値は長軸3.15m、短軸1.55m、検出面からの深さは12cmを測る。検出面はⅢb層

直下（V層上面）だが、調査区南壁の土層断面でIV層上面が構築面であることを確認した。覆土は、1層の黒褐色粘質土、2層にぶい黄褐色粘質土、3層の灰褐色粘質土に細分される。床面は掘形底面で凹凸が目立ち、しまりはあまりない。壁面は緩い傾斜で立ち上がる。周溝は東壁沿いで検出した。幅26cm、深さ5cmを測る。覆土はぶい黄褐色粘質土である。ピットは、内部に4基検出したが、主柱穴と思われるものはない。平面形は円形若しくは梢円形を呈し、長径28～42cm、短径24～34cm、深さ12～23cmを測る。出土遺物はないが西壁際に大型の自然礫が出土した（図版25）。

SI1011（図版3・6・25）

OW20区に位置する。標高値は86.9～87.0mである。平面形は不整の梢円形を呈しているが、北壁は調査時の確認トレンチにより欠損している。現存値は、長軸2.36m、短軸2.32mを測る。

長軸方向は南北方向を示す。最終精査時にVI層上面で検出した。円形に廻る小ピット群と周溝、地床が確認されたが、壁の立ち上がりは明瞭でない。床面は平坦でやや固くしまっている。周溝は東側の壁沿いで検出した。幅14cm、深さ5～6cmを測る。地床がは竪穴のほぼ中央に位置している。長径36cm、短径34cm、焼土及び焼土化した部分の厚さは4cmを測る。円形に廻る小ピット群は、径6～8cm、深さ8～10cmを測る。遺物は出土していない。

SX1001（図版3・6・25）

OW19区に位置する。標高値86.9～87.0mである。平面形は不整の梢円形を呈している。長軸2.53m、短軸2.00m、検出面からの深さは11cmを測る。長軸方向は南北方向を示す。IV層上面で検出した集石遺構（SS1015）と重複しており、礫を取り上げ後、VI層上面で確認した。覆土は単層（灰褐色粘質土）で層厚5～6cmと薄い。底面はやや平坦だが集石遺構が位置する部分は凹凸が目立ち、しまりはあまりない。壁面は多少緩やかに立ち上がるが、断面形は浅い皿状を呈す。ピットは、内部に3基検出したが主柱穴と思われるピットはない。平面形は、円形か梢円形を呈し、長径20～34cm、短径16～30cm、深さ8～19cmを測る。遺物は出土していない。この遺構は竪穴住居とする付帯施設（が・周溝）は確認できず、また重複している櫛集中区との関連性は不明であるため、竪穴様遺構とした。遺物は出土していない。

SX1002（図版3・6・25）

OX19区に位置する。標高値は87.0～87.1mである。平面形は不整の梢円形を呈している。長軸2.63m、短軸2.47m、検出面からの深さは8cmを測る。長軸方向はN-90°-Eを示す。検出面はVI層上面である。この竪穴は最終精査時に検出したもので、壁面の立ち上がりがやや不明瞭である。覆土は単層で灰黄褐色粘質土である。底面は平坦でやや固くしまっている。内部で3基のピットを検出したが、主柱穴と思われるピットはない。ピットの平面形は梢円形で、いずれも掘り込みが浅く皿状を呈す。この遺構はSI1010と同様に詳細が不明であるため竪穴様遺構とした。遺物は出土していない。

（3）性格不明遺構

ピット（図版3・7・8・26）

調査区のほぼ全域に点在する63基を検出した。全体的にまばらだがOX19・20区のSI1011とSB1005周辺にやや集中している。平面形は円形・梢円形・長梢円形・不整形を呈するものが見られる。断面形は半円状・台形状・V字状・浅い皿状を呈するものが見られる。長径15～66cm、短径13～54cm、深さ7～38cmを測る。P1025は壁面・底面に扁平の円礫が見られ、自然埋没とは異にするものである。P1026・1027・1078は漏斗状ないし階段状で、柱痕の可能性が考えられる。覆土は、単層

のものと複層のものがあり、いずれも暗褐色粘質土ないしにぶい黄褐色粘質土である。竪穴住居との重複関係にあるものは検出していないので、ピット群との時期差は明瞭でない。

集石遺構（図版3・6・7・8・26）

OW20区、OX18・19区に位置する（図版8）。標高値はSS1019・1020が87.1m、SS1015・1016が87.0m、SS1017・1018が86.7mである。集石には円礫と角礫があり、前者はSS1015のみである。礫下には浅い窪み状のピットが検出され厚さ10cmの覆土が堆積する。磨石（図版12-37）が出土した。SI1010と重複しているが関連性は不明である。SS1016～1019（角礫）の集石範囲は90×60cm～265×172cmを測り、礫下に8～10cmの覆土（灰黄褐色粘質土）が堆積する。礫中には被熱したものも少量含まれ、さらに少量ではあるが削片が含まれている。OW20-17区の調査区北壁沿い（SI1006の東側）に、同一母岩の粗削削片が集中して出土した（図版26）。下にピットの存在は認められないことから、平地に破棄されたものと推測される。

2 上層の遺構（縄文時代中期前葉）

A 概 要

上層では、竪穴住居1軒、掘立柱建物1棟、土坑2基、性格不明遺構2基、ピット17基、焼土（野外炉？）2基を検出した。各遺構は単発的で、竪穴住居は調査区の東端部、掘立柱建物・焼土は中央部、土坑は南西部、ピットはまばらに点在している。掘立柱建物は、整理段階で再検討し、図上復元した。

B 遺 構 各 説

（1）掘立柱建物（図版2・12・14・27）

SB66（図版2・12・14・27）

OW19・20区、OX19・29区に位置する。標高値は87.3～87.3mである。柱間にややばらつきがあるが、周辺にピットの点在がなく、平面形が細長五角形を呈する配置を示すことから、掘立柱建物と認識した。長軸3.10m、短軸1.60mを測る。主軸方向はN-80°-Eを示す。

柱穴の平面形は円形ないし梢円形を呈し、長径は52～107cm、短径41～84cm、深さ16～28cmを測る。P74は柱痕を確認した。P78の断面は階段状を呈している。覆土はP75～77は2層（暗褐色土ないし暗褐色砂質土・にぶい黄褐色砂質土）、P77は3層（黒褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色砂質土）、P74は4層（黒褐色土・暗褐色土（2分）・にぶい黄褐色砂質土）に細分される。検出面はⅢb層上面で、貼床・炉跡・焼土などの痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

（2）竪 穴 住 居（図版2・12・13・27）

SI67（図版2・12・13・27）

OX18区に位置する。標高値は87.1～87.3mである。竪穴の東側半分は2006年度調査区（前掲）になる。南壁は傾斜に吸収され不明である。平面形は、残存部の形状から隅丸方形と推測される。長軸3.60m、短軸1.90m、検出面からの深さ22cmを測る。長軸方向は、おむね南北方向を示す。覆土は1層の黒褐色土、2層のにぶい黄褐色土、3層のにぶい黄褐色砂質土に細分される。床面は振動底面である。平坦で中央部は固くしまっている。壁面は急傾斜で立ち上がっている。検出面はⅢ層上面である。内部に4基

のピットを検出したが、主柱穴と認識できるピットはない（P 1～3）。平面形は円形ないし梢円形を呈し、径は 16 × 18cm ～ 30 × 32cm、深さ 20 ～ 25cm を測る。

炉は、床面に浅い掘込みが見られる。覆土は、1・2 層に炭化物、3 層に焼土が多く含んでいる。遺物は、覆土中から縄文土器（40）・石器類（67・68・76）が出土した。石器類は磨製石斧・石皿・剝片である。

（3）土 坑

SK68（図版 2・12・13・27・28）

OX20 区に位置する。標高値は 87.5 m である。平面形は円形を呈し、直径 1.06 m、検出面からの深さ 37cm を測る。断面形は台形状を呈している。検出面はⅢ a 層である。覆土は、1 層暗褐色土、2 層にぶい黄褐色砂質土に細分される。2 層は黒褐色土にぶい黄褐色土の混合土で小礫を多量に含むことから、埋め戻し土と推測される。また、1 層上位には人頭大の円礫が出土しており配石土坑と考えられる。

出土遺物は、覆土中から不定形石器（66）が出土した。

SK69（図版 2・12・13・28）

OW20 区に位置する。標高値は 87.5 m である。南側で P79 と重複し、これを切っている。平面形は不整形の梢円形を呈し、長軸 1.68 m、短軸 1.09 m、検出面からの深さ 33cm を測る。断面形は半円状を呈している。検出面はⅢ a 層である。覆土は、1 层黒褐色土、2 層暗褐色砂質土、3 層にぶい黄褐色砂質土に細分される。レンズ状堆積である。開口部の北東部付近で石製品（三角形岩版 85・87）が出土した。出土遺物は、覆土中から剝片石器（65）が出土した。

（4）性格不明 遺構

SX72・73（図版 2・12・15）

OW20 区に位置する。標高値は 87.4 m である。両遺構は南側半分が調査区外になるため平面形は不明だが、SX72 は直径 1.65 m、深さ 44cm を測り、断面形は半円形状である。SX73 は直径 1.83 m、深さ 38cm を測り、断面形は箱状を呈している。検出面はⅢ a 層である。覆土は、SX72 は 1 层暗褐色土、2 層褐色砂質土、3 層灰黃褐色砂質土に細分され、SX73 は、1 层暗褐色土、2 ～ 4 層にぶい黄褐色砂質土（3 分層）に細分される。いずれもレンズ状堆積である。遺物は、SX73 の覆土中から剝片が 1 点出土した。

ピット（図版 2・12・13・14・28）

検出状況は単発的で、調査区の北西側（OW20・21 区に位置する）と中央部（OW19・OX19・20 区に位置する）に点在している。標高値は北側で 87.3 ～ 87.4 m、中央部で 87.2 ～ 87.3 m である。平面形は、円形ないし梢円形を呈し、長径 43 ～ 112cm、短径 42 ～ 83cm、検出面からの深さ 19 ～ 49cm を測る。断面形は、半円状・台形状・半球状を呈している。検出面はⅢ a 層である。

覆土はそれぞれ 2 ～ 4 層で、1a 層黒褐色土、1b 暗褐色砂質土、2 層にぶい黄褐色砂質土、3 層灰黃褐色砂質土に細分される。出土遺物は、P80・83・85・86 の覆土中から縄文土器が出土した（小破片のため未掲載）。

焼 土（図版 2・12・15・28）

OW20・OX20 区に位置する。標高値は 87.4 ～ 87.5 m である。計測可能な焼土の範囲は、長径 150cm、短径 109cm、焼土の厚さは 16cm を測る。検出面はⅢ b 層上面である（当該地の OW・OX20 区はⅢ a 層の堆積がなく、Ⅱ 層直下がⅢ b 層である）。焼土中には炭化粒子が少量含まれる。遺物は出土していない。

第V章 遺 物

1 概 要

本調査区の出土遺物は、上・下層から縄文時代前期後葉以前～中期前葉の土器・石器・石製品が出土した。出土総数は、浅箱に換算しておおよそ 18.5 箱である。そのうち上層では、土器 1 箱、石器・石製品が 5 箱、下層では、土器 0.5 箱、石器 12 箱である。出土状況について見ると、下層出土の土器・石器は、竪穴住居内 (SI1006・1007)、ピット内 (P1025・1027)、集石遺構 (SS1015) などから石器類の出土が見られ、遺構外では各遺構周辺でまばらに見られた。

上層出土の土器・石器・石製品では、竪穴住居内 (SI67)・土坑内 (SK69) 出土の土器がややまとまって見られ、遺構外では調査区内全般で散発的に出土した。出土層位は、上・下層とも厚い間層 (鹿瀬輕石質砂層) によって混じりのない出土状況で、上層 (Ⅲ a 上) では縄文時代中期前葉、下層 (Ⅲ b 下) では前期後葉以前の遺物がそれぞれ散発的ではあるが各時期の所産として一括できる。

資料の提示については、大坂上道遺跡 II (前御) に準じておおり、実測図・写真・観察表を基本とした。土器の分類については、大坂上道遺跡 [龍沢 1995] に準じたが、本調査区の土器は出土量が少なく小破片が多いことから、細分による時期決定は行っていない。よって本稿では、「縄文時代前期末葉以前」を後葉以前、「縄文時代中期初頭～前葉」を前葉として記述するものである。

第 I 群土器 ······ 縄文時代前期の土器 (下層)

第 II 群土器 ······ 縄文時代中期の土器 (上層)

以下に下層・上層の順で各遺物の説明をする。

2 遺 物 各 説

A 下層出土土器 (図版 9・29)

I 群土器 縄文時代前期後葉の土器群である (1 ~ 12)。

1 は SI1007 の西側周辺から出土した。深鉢口縁部破片である。口縁部上端から下端にかけて波状の貼付帶が縦位に施され、その上には半截竹管状の工具による連続刺突文が加えられている。同様の刺突文は、口唇部と頸部に横走する。頸部の横走連続刺突文の下位には、平行して結節回転文が見られるが縦位の貼付帶右側には見られない。口縁部は無文帶である。体部は、斜行する燃糸側面圧痕文 (L) である。2 ~ 4・7・9 ~ 10 は縄文のみの破片で、2・3 は外反する口縁部破片である。3 は口唇部にボタン状小突起を有する。2 ~ 4・9 は RL の斜縄文、7・11 は LR の斜縄文を施している。5・6 は同一個体で口縁部破片である。山形小突起を有す口縁で、突起部位に半円突起を貼付し、中央に縦刻目文を施している。口縁部上位と下位に平行して半隆起線が横走している。平行半隆起線の間に縦位の刻目文が施される。8 は横位の平行沈線による区画内に爪形文が巡る。地文は RL の斜縄文を施す。12 は深鉢の底部破片で断面は張り出しを有している。体部は燃り糸文 (L) を施し、底面は編組の圧痕が認められる。編組圧痕は、タテ材が幅広で、ヨコ材が短冊状を呈しており、ござ編みと推測される。1 と同一個体と考えられる。

B 上層出土土器（図版 16・30）

II群土器 繩文時代中期前葉の土器群である。（40～55）

40は唯一の復元個体である。SI67 覆土中から出土した。深鉢の上半部で胴部は直立するが口縁部が多少外反し、山形小突起を有する。口縁部上位に横走の沈線と下位に平行する2条の半降起線で区画され、その間に刻目文が巡る。体部は、器面全体にミガキ調整を施し無文である。41～46は頸部から口縁部の破片である。41～43は内湾する口縁で特に41・43はキャリバー状を呈している。口縁部文様帯は、沈線文、半降起線文、刻目文、交互鋸歯状文等による文様構成である。42は口縁部上位から刻目文、交互鋸歯状文、半降起線文が施されている。44はSK69出土、横走沈線と半降起線の区画内にLR斜縄文、46は半降起線直下にRLの斜縄文を施している。47～52は胴部破片で、47はSK69出土、縦位に半降起帶による区画文が垂下し、地文は器面全体にややくずれぎみの木目状櫛糸文（L）を施している。48～51・53は斜縄文と結節回転文を施すもので、48・49はLRの斜縄文と横位に結節回転文を施すもの、50・51・53・54はRLの斜縄文と縦位に結節回転文を施すものである。52はLR斜縄文と沈線が見られる。55は底部破片で端部に張り出し部を有す。器面には縦位に半降起帶による区画文が垂下している。

C 下層出土石器（図版 9～11・29）

遺構内出土の石器は、28 打製石斧・33 磨石・39 石皿（SI1006）、34 磨石（P1027）、37 石皿（P1025）、38 磨石（SS1015）で、ほかは包含層出土である。

1) 石 勺（13・14）

いずれも縦長身部形態は13が直線的、14は弧を描くように曲線を呈す完形品である。二次調整は、両者のつまみ部の抉りと13の下端部、14の右側辺部に両面調整を施している。

2) 石 錐（15）

1点のみの出土である。素材は薄い横長削片で打点部をつまみとし長めの刃部加工である。使用痕と思われる摩滅は見られない。

3) 不定形石器（16～25）

やや厚手の剥片を素材としているもので、部分的に二次調整を施す剥片ないし使用痕が認められる剥片を一括した。16～19は二次調整が認められるものである。16・17・19は連続剥離調整を施すもので、16・17は両面調整が見られる。20～23は片側縁に軽い二次調整が認められるものである。24は部分的に使用痕が認められるものである。25は厚手の礫剥片素材で片手で把持できる大きさである。両側縁に粗い打撃調整を加えたものである。

4) 瓧状石器（26・27）

2点のみの出土である。粗い両面調整による完形品で、基部から刃部への開きがやや小さい。刃部の調整を集中的に施することで片刃様の形状を呈している。この石器は、素材や二次調整等から上野東遺跡〔高橋 2006〕で「甕状石器」としたものに極似している。

5) 石 錘 (28)

扁平鐸の両端に打撃調整を加え抉りをつけたもので、1点出土している。素材は、板状の円碟である。

6) 敲 石 (29~31)

29は、端部に集中した打撃痕が見られる。30は扁平鐸の片面全体に敲打痕が見られ、部分的に浅い窪みを残している。31は、厚手な円碟の周線部に打撃痕が見られる。

7) 磨 石 (32~35・37)

扁平鐸の一辺に磨面を有すもので、使用面が平坦になる。いずれも片手ないし両手で把持できる大きさで、表裏面には使用痕は認められない。32はSI1006、33はP1027、37はSS1015の出土である。

8) 石 盆 (36・38)

36はP1025、38はSI1006から出土した。大型の扁平鐸でいすれも側縁の一部に打撃痕を残している。36は片面全体に滑らかな磨面でほぼ均質である。38は両面に使用面と推測される磨面が認められるが、主に中央部に集中している。

9) 石 核 (39)

全体的に荒い剥離作業が行われたと考えられる本核で、頭部の平坦な打面には数回の剥片剥離作業が行われたと思われる打撃痕が認められる。

D 上層出土石器(図版16~19・28)

遺構内出土の石器は、65~67・71 不定形石器・敲石 (SI67・SK69)、70 磨製石斧 (SI67)、76 石皿 (SI67) で他は包含層出土である。

1) 不 定 形 石 器 (56~68)

やや厚手の剥片を素材としているもので、側縁部、端部に二次調整を施す剥片なしし使用痕が認められる剥片を一括した。石材・素材は下層出土に類似している。56~58・60は連続剥離調整を施しているもので、56は左側縁は正面に剥離痕を、右側縁は裏面に剥離痕を残す。60はその逆の調整である。56の素材は横長剥片である。58は片側縁の調整で両面剥離調整が施されている。59・61~65は不連続な細かい二次調整が認められるものである。66・67は、部分的に使用痕が認められるものである。68は極めて厚手の剥片で片側縁に粗い剥離痕が認められ、鋸歯状を呈している。

2) 磨 製 石 斧 (69・70)

2点のみの出土である。70はSI67の覆土中から出土した。いずれも入念な研磨仕上げであるが、70は片面に擦り切り痕が残っている。69は基部平面形が尖頭状を呈し、身部も薄く小型のものである。

70は基部平面形が台形を呈し身部に厚みがある。刃部の形状は69は片刃、70は両刃成形である。両者の刃部には使用痕と思われる歯こぼれが認められる。

3) 敵 石 (71 ~ 73)

扁平礫の素材で、71は、下端部の一部に打撲痕が見られ、両面中央部に縦位の溝状磨面が見られる。72は両端に敲打痕が見られる。73は荒削り素材と思われる。粗い打撃剥離痕が一边に集中して残るのみで、部分的に礫皮が残っている。

4) 磨 石 (74・75)

74・75は、やや厚手の扁平礫素材で下端に磨面を有するもので、使用痕はやや幅広の磨面を有するものである。74は周縁部の一部に荒い打撃剥離痕が見られる。片面には細い溝状の磨面が見られる。

5) 石 盆 (76)

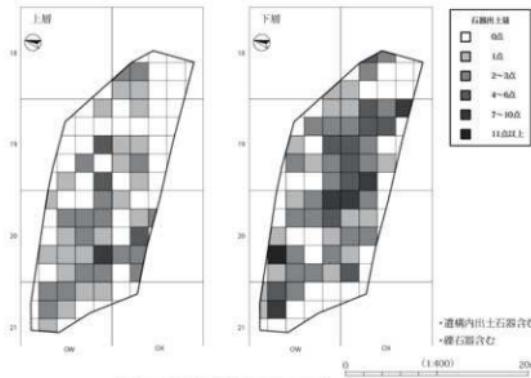
SI67の覆土中から出土した。扁平礫の素材で、両面全体に滑らかな磨面が見られる。

6) 石 核 (77・78)

77は、母岩から大まかな剥片剥離作業により、肉厚な剥片を本石核としたもので、正面の左側縁に集中して剥片剥離痕が見られる。78は正面の上端に平坦な打面が残るものである。打面からの剥片剥離作業は正裏面と右側面に荒削りの剥離作業が行われている。

7) 石 製 品 (79 ~ 86)

石製品は、三角形岩版として認識できるものとその小破片・未製品等を一括した。79はOX18区、82・84はSK51の周辺、ほかはOW・OX19区に集中していた。79・82は頂点部に亀頭状を呈するもので、79は2か所、82は1か所欠損している。80・81は板状の素材破片で細かな成形痕は認められない。83は、欠損品と思われ、1面に刻線を有している。85・86は、板状の三角形岩版で、85は表・裏面とも丁寧な磨り調整が見られる。86は表・裏面の成形は粗いが縁辺部は丁寧に磨かれている。尖頭部には打撃痕が残る。



第8図 石器出土分布図(上・下層)

第VI章 ま と め

これまで、阿賀野川及びその支流による河岸段丘上に分布する多くの遺跡は、磐越自動車道・一般国道49号掲川改良事業等の建設に伴い発掘調査が行われて来た。その報告の中でも縄文時代前期～中期の調査例は少くない。特に大坂上道遺跡周辺では、上下層二枚の包含層が存在する複合遺跡の発掘調査が行われ、上層に縄文時代中期以降、下層に同前期以前が重複する事例もいくつか報告されている（上野東遺跡・現明鏡遺跡・猿額遺跡・北野遺跡・向大浦遺跡）。そこで、各遺跡における遺構の下層検出状況に注目して見ると、上野東遺跡では前期後葉～末葉の竪穴住居1軒、土坑5基、猿額遺跡では土坑2基、焼土4基、ピット98基のうち住居の可能性があるピット群I・II、現明鏡遺跡では焼土1基、遺物集中地点4か所、集石遺構1基、大規模集落を形成していた阿賀野川支流の常浪川左岸に所在する北野遺跡で、竪穴住居18軒、掘立柱建物2棟、土坑53基、焼土53基、集石7基、ピット29基、土器捨場や広場などの諸施設がまとまって検出された。その中で後葉～末葉の集落跡では、竪穴住居9軒（大型住居5軒、小型住居4軒）、掘立柱建物2棟、土坑数基が検出された。この北野遺跡の事例は別として、阿賀野川の河岸段丘上に所在する他の遺跡は、集落の様相を確認し得るものではないと思われる。上野東遺跡、猿額遺跡の住居事例では、掘り込みが皿状で浅く、炉を有するが主柱穴が確認されていないもの、掘り込みが確認できないが柱穴の配置が環状に並ぶものなどである。今回の大坂上道遺跡の下層調査では竪穴住居6軒、竪穴構造2基、土坑1基、掘立柱建物1棟、ピット53基、集石遺構6基を検出したが、それぞれの所属時期を推定する出土遺物は、遺構と共に作るものやその周辺に分布するものも含めても極めて少ない。北野遺跡、上野東遺跡における後葉～末葉の住居内は、鹿渕輕石質砂層に覆われているが、本調査区では、その堆積状況は確認されていない。また、石器組成では、当該期の集落からまったく出土していない磨石類（早期～前期中葉）に極似するものが含まれている。このため、遺構の所属時期については更に検討を要するところであるが、前期後葉～末葉の上器（大木5式対比の縄文状の区画・大木6式対比の地縄文+結節回転文）と当該期以前の石器が混在することから、後葉以前～末葉の所産と推考する。

1 下層（縄文時代前期後葉）の遺構・遺物について

A 遺 構

本調査区（320m²）における下層の遺構は竪穴住居が集中していた。標高86.7～87.3mの台地に構築された竪穴住居は、平面形が楕円形を基調とし長径が2.5m～5.0mを測り、壁面の立ち上がりはやや斜傾し深さ15～20cmを測る。覆土は1～3層に細分される。付帯施設は周溝と地床炉、壁沿いに並ぶピット列などが見られる。SI1006・1011・SX1001のように覆土中や壁の周辺に大型の円礫（台石・石皿）が1点ないし2点出土するものも見られる。竪穴中央部の床面が硬化しているもの（SI1006～1009・1011）がある。主柱穴となるものは認められないが、内部に見られるピットは、深いもので18～23cm、浅いものは10cm未満を測るもので、その配列には規則性はない。上野東遺跡では当該期の竪穴住居（SI8）が1軒検出されており、環状に巡るピット列と地床炉を持つSI1011に極似しているが、径5.7×5.6mの規模を有するのに比べSI1011は2.36×2.32mと小規模である。なお、前記のSI8については「テ

ント式住居」とし、遺跡の性格として「季節的な利用地」と推定している¹⁾。

本調査区の竪穴住居群は径5m未満を測るものが多く、前述した北野遺跡の小型竪穴住居規模である。

しかし、それらの配置状況を比較すると、大型住居5基と小型住居4基がセット関係にあり、竪穴住居間が広く広範囲に散在する北野遺跡に対し、本調査区は比較的近接した配置となっている。2008年度調査区では検出されていないことや、同一時期の構築と断定できないことから、竪穴住居が本調査区南側に広がる可能性を考慮しても、やや小規模単位の集落の可能性を指摘しておく。

B 遺 物

下層出土の遺物の多くは石器類（剝片・礫）で、土器の出土は極めて少ない。石器類は調査区全域に点在していたが、土器は東側のOW19、OX18・19区（SI1007・1009周辺）に偏って出土した。掲載土器は、1以外は小破片である。1～3、5・6は口縁部破片で、頸部から口唇部が短く外反もしくは外折する。文様構成（口縁部文様帶）が顕著に認められるものは、1、5、6、8である。文様帶は半截竹管様工具を中心とした列点状刺突文、横位沈線・刻目文、半隆起線等による区画文が見られる。1は縦位にやや幅広の貼付帯を口唇部から頸部にかけて施し、その上部にも列点状刺突文が施される。このような形態・文様による諸特徴をあげると、東北地方の大木5式ないし6（古）式、北陸地方の真脇遺跡第6群土器〔小島1986〕、新崎式に対比できるものであろう。

石器組成は、本調査区の西側に隣接した位置にある中棚遺跡に類似している〔滝沢1995〕。厚手の剥片を含めた剝片石器と礫石器の比率は前者が多い。しかし、定形石器（主に剝片石器）が極めて少なく、所属時期を明確なものにする器種は少ない。ここでは、特徴的な器種について記したい。

完形品で出土した箆状石器（26）は遺構内（SI1006）から1点、OW21-1区から1点（27）出土した。この石器は、本遺跡のほか、猿額遺跡、中棚遺跡、上野東遺跡等で出土しており、縄文時代前期末葉～中期前葉に出現するとされている（この中には、箆状石器・石箆という器種名も含まれている）。一方で、出土量の多い厚手の剝片を素材とした不定形石器も当該期の特徴とされる。このような石器組成の類似点をから、前述の土器と同一包含層出土という関連性からも同時期の範疇と捉えられる。なお、猿額遺跡や本遺跡の前回調査（1992・1993年度調査）では旧石器が出土しているが、今回は出土していない。

2 上層（縄文時代中期前葉）の遺構・遺物について

A 遺 構

上層の遺構は散発的な分布であった。大坂上道遺跡が位置する台地は南北に延び、前回の面積も含んだ調査区東端に南西から北東に伸びる埋没した旧河川があり18区ラインから急傾斜になる。全体の遺構配置を見ると台地の頂部から東側斜面に向けて広がっている。掘立柱建物（SB66）は本調査区の中央部に位置し、竪穴住居（SI67）は東端に位置する。さらに竪穴住居の東側に隣接してSB1（前回調査区：2006年）がある。土坑は総体的な配置をみると台地頂部に2ブロック、東側斜面に1ブロックの分布状態がみられる。この傾向は前回調査（前掲）にも見られる。前回調査区で検出したSK15（表被葬の墓坑）・17（配

1) 上野東遺跡〔高橋2006〕では、竪穴住居や建物が検出されていない猿額遺跡、中棚遺跡、現明遺跡等も同様の性格付けを示唆している。

石墓坑・26（立石痕を有す墓坑）が点在していたところから見て、本調査区のSK69も墓坑の可能性が強い。ピットは掘立柱建物を構成するもの以外は極めて少なく、前調査区も含めて11基にすぎない。焼土は本調査区の台地頂部（OW・OX20区）で2基、前回調査区で4基（うち3基は東側斜面）検出された。上層の遺構は、総体的に見て検出率は低い。また、竪穴住居や掘立柱建物も1～2軒に留まっており、野外炉と考えられる焼土が点在している。こうした傾向は前回調査区（前掲）でも同様で、報告の中では「集落の中心が調査区北側に位置する」〔滝沢前掲〕とあり、本調査区を加味してもその状況が窺われる。つまり、安定した居住域ではなく一時的な利用が推測される。

B 遺 物

上層出土の遺物は、下層同様に少ないが、土器と石器の比率はほぼ同じである（石器の出土量がやや少ない）。前調査区は中期初頭～前葉の土器を主体とし調査区のはば全域で出土しており、その分布がさらに南側へ広がっていると思われる。本調査区では、SI66から復元可能土器が1個体（40）とSK69から大型の胴部破片土器（47）が出土し、その周辺から石製品（三角形岩版）が遺構検出面から出土した。

本調査区における出土土器の所属時期は、中期前葉として一括したが、その中から近似するものをあげると、図版16～40は大坂上道II分類の第I群第1類B1種（図版16～40：北陸系）に形態、口縁部文様帶の特徴が見出され、48～51の胴部破片にみられる結節回転文は、I群第2類A1種（図版13～12：東関東系）の胴部文様に類似点が見られ、41・42の口縁部破片はI群第2類A3種（図版13～3：東関東系）に近似している。しかし、本調査区の出土土器はさらに一步進んだ対比資料はまだ少ないため断定しがたい。

石器組成は、不定形石器が主体である。下層と近似する点は、厚手の剥片素材の不定形石器がみられる点である。特徴的なのは石製品で、偶像的な三角形岩版である。また、80・81・83のような欠損品や未製品（素材片）などの出土も注目される。

特に頂点部に亀頭状の突起を有すものは県内では希薄で、同器種は前調査区で1点出土した他、キンカ杉遺跡〔遠藤2006〕でも1点出土している。この岩版の出現は大木7(a・b)式期〔阿部2010〕と示され、同形態の土版とともにほぼ同時期に置いている。また、土版は人体文様が強調されているとし、岩版に見られる線刻文はそれに近似することも示している。こうした形態、文様等の特徴が岩版にも合わせ持つとすれば、岩偶の一形態として捉えられることも加味して考えていいだろう。85・86の様な無文の岩版は、東北・北海道南部（渡島半島）では、有文（あるいは線刻縫）のものが中期中葉～後期にかけて、多量化していく三角形岩版に含まれる無文の岩版に共通する要素がみられる。特に85のように側縁部を研磨して仕上げた無文の岩版は、道南部の渡島半島に位置する大船C遺跡〔阿部1998〕で中期後葉の住居跡から多く出土した例が報告されており、東北北半部の小牧野遺跡〔児玉2001〕からは数百点の無文岩版が出土している。これらの石製品は、精神文化的な要素が強い遺物と推測され、本遺跡の性格を考え上で重要な資料といえる。

要 約

- 1 大坂上道遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西 1827 番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に位置し、標高は 83 ~ 88 m である。今回の調査区は、上層面で 87 ~ 87.5 m、下層面で 86.5 ~ 87.3 m である。
- 2 調査は一般国道 49 号掲川改良事業に伴い、2011 年（平成 23 年）5 月 9 日～6 月 24 日に実施した。調査面積は上層 320m²、下層 320m² である。
- 3 調査の結果、縄文時代前期後葉（下層）、縄文時代中期前葉（上層）の遺構・遺物が層を異にして検出された。
- 4 検出した遺構は、前期後葉以前（下層）の掘立柱建物 1 棟、竪穴住居 6 軒、竪穴様遺構 2 基、土坑 1 基、集石遺構 6 基。中期前葉（上層）の掘立柱建物 1 棟、竪穴住居 1 軒、土坑 2 基、性格不明遺構 2 基、ピット 17 基、焼土 2 基である。
- 5 本調査区は台地の西側で沢に面した部分という立地条件の中で、下層と上層の遺構分布状況（集落形態）に多少の差異が見られるが、小集落を形成していたと推測される。
- 6 出土した遺物は、上・下層から縄文土器・石器・石製品で浅箱にして約 18.5 箱である。
- 7 土器は、下層で前期後葉の南東北系大木 5・6（古）式、上層で中期前葉の北陸系新崎式、真脇第 6 群土器に對比されるものである。
- 8 石器は、下層で前期全般に見られる笠状石器、上層で中期以降に多出する磨製石斧が出土した。そのほか上層で三角形岩版 3 点出土しているが、そのうち 2 点は土坑（SK69）検出面周辺から出土した。

引用・参考文献

- 阿部健太郎 2010 「南東北の三角形岩版について」『福島考古』第 51 号 福島県考古学会
- 阿部千春 1998 『大船 C 遺跡』北海道南茅部町教育委員会
- 荒川隆史ほか 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 93 集 和泉 A 遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤 佐 2006 「キンカ杉遺跡」『東蒲原郡史』資料編 I 原始 東蒲原郡史編さん委員会
- 小川真一ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 204 集 萩原遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 111 集 黒田古墳群』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長田友也 2004 「新潟県アチャ平遺跡出土の線刻繩(岩版)についての考察」『三面川流域の考古学』第 3 号 奥三面を考える会
- 金内 元ほか 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 222 集 向大浦遺跡・上空野中丸遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 桐原雅史ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 186 集 大坂上道遺跡 II・猪飼遺跡 II』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 児玉大成 2001 「绳文時代後期前半の岩版類と大型配石構造」『南北海道考古学情報交換会 20 周年記念集 渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会
- 高橋保・高橋保雄 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 57 集 五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 119 集 北野遺跡 I (下層)』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 141 集 北野遺跡 II (上層)』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 160 集 上野東遺跡・現明嶽遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 浅沢規朗ほか 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 68 集 大坂上道・猪飼遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助ほか 2003 『新潟県の縄文集落』新潟県考古学会
- 寺村光晴ほか 1979 『大角地遺跡』青海町教育委員会
- 田海義正ほか 1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 55 集 清水上遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中島栄一 2006 「屋敷島遺跡」『東蒲原郡史』資料編 I 原始 東蒲原郡史編さん委員会
- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編 I 考古
- 新潟県 1983 『新潟県史』資料編 I 原始・考古 I 考古編
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974 『吉野屋遺跡』調査報告 第 5 冊 新潟県立三条高等学校
- 卷町 1994 『卷町史』資料編 I 考古 新潟県卷町
- 八幡一郎 1958 『刈羽貝塚』北方文化博物館研究報告第一 (財) 北方文化博物館
- 山田芳和 1986 「真脇遺跡」(復刻) 能町町教育委員会 真脇遺跡発掘調査団
- 渡辺 弘 2002 「津川町六角原遺跡 一次調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成 13 年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

遺構観察表(上・下層)(1)

遺構 No.	調査区	位置	形状	断面	覆土	法 墓			面積(m ²)	方位	備考
						長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)			
S-B66	上層	OW19-20・25 OW19-21・21 OW20-5 OW20-1				310	160	(--)	5.12 m ²	N 80° -E	
		OW19-21	円形	半円	柱頭	78	72	23			
		OW20-1	円形	台形	ブロック	65	54	19			
		OW20-5	楕円	楕円	水平	52	41	16			
		OW19-25	円形	台形	水平	76	70	24			
		OW19-20・25	円形	椭円状	レンズ状	107	83	28			
S-107	上層	OW18-12・16・17・21							5.46 m ²	N 31° -W	
		(長方形)	柱狀	レンズ状	(360)	(190)	12				
		楕円	台形状	单頭	30	24	25				
		円形	台形状	单頭	18	16	24				
		円形	台形状	单頭	32	30	29				
		円形	柱狀	レンズ状	(34)	42	6				
S-B105	下層	OW19-16・17・21・22							3.33 m ²	N 12° - W	
						284	145	—			
		OW19-16・17	円形	半円状	单頭	22	20	20			
		OW19-22	円形	U字状	单頭	26	22	19			
		OW19-22	円形	U字状	单頭	24	24	19			
		OW19-21	円形	U字状	单頭	25	20	16			
		OW19-21	楕円	U字状	レンズ状	35	23	11			打製石片 滑石
		OW19-21	円形	U字状	单頭	25	22	20			
									5.93 m ²	不明	
						(486)	(173)	(8)			
S-11007	下層	OW18-12・13・17・18・19・22・23							8.04 m ²	N 10° - W	
		楕円	柱狀	レンズ状	—	368	(290)	10			
		円形	〔半円状〕	单頭	(20)	26	6				
		円形	〔半円状〕	单頭	28	24	13				
		円形	半円状	レンズ状	36	30	19				
		楕円	半円状	柱頭	34	28	18				
		円形	倒錐形	柱頭	28	24	23				
		楕円	台形状	单頭	(53)	45	8				
									4.85 m ²	N 80° - W	
S-11008	下層	OW20-7・12・13・17・18									
		楕円	柱狀	レンズ状	—	293	230	22			
		円形	内くぼみ状	单頭	40	38	16				
									9.56 m ²	N 70° - W	
S-11009	下層	OW19-12・14・18・19・23・24									
		楕円	柱狀	レンズ状	—	408	292	16			
		円形	半円状	单頭	26	26	10				>SB1009
		楕円	倒錐形	单頭	28	26	21				
		円形	半円状	单頭	36	34	10				
S-11010	下層	OW20-1・2・6・7・12							3.70 m ²	不明	
		〔楕円〕	柱狀	水半状	—	320	(155)	12			
		円形	半円状	レンズ状	35	32	14				
		OW20-6・7	円形	半円状	—						
		OW20-7	楕円	台形状	单頭	28	25	14			
S-11011	下層	OW19-11・12・16・17OW19-15							4.99 m ²	N 74° - E	
		楕円	柱狀	单頭	236	232	8				
		OW20-7・8	楕円	柱狀	单頭	36	34	6			
									4.27 m ²	N 6° - E	
S-X1001	下層	OW19-8・9・13・14									
S-X1002	下層	OW19-16・OW19-16・17	PIE	柱狀	单頭	265	247	—	4.16 m ²	不明	

観察表

遺構観察表（上・下層）(2)

順番 番号	調査区 場所	標示	グリッド	形態	断面	層土	法線			備考
							長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	
S K68	上層	土坑	O X20-12	円形	円形状	レンズ状	63	55	37	
S K69	上層	土坑	O W20-20	楕円形	半円状	レンズ状	168	109	33	
S F70	上層	地土集中	O W20-10	楕円形	半円状	單層	150	109	16	
S F71	上層	埴生集中	O X20-2・7	[楕円形]	—	—	[70]	[66]	—	
S X72	上層	性格不明	O X20-21・22	[楕円形]	半円状	水平状	[165]	[160]	[44]	
S X73	上層	性格不明	O X20-1・6	[楕円形]	椭円状	レンズ状	[183]	[106]	[38]	圓石
P74	上層	ピット	O X19-21	円形	半円状	柱頭	78	72	23	S B66
P75	上層	ピット	O X20-1	円形	円形状	ブロック	65	54	19	S B66
P76	上層	ピット	O W20-5	楕円形	橢状	水平状	52	41	16	S B66
P77	上層	ピット	O W19-25	円形	円形状	水平状	76	70	24	S B66
P78	上層	ピット	O W19-20・25	円形	橢圓状	レンズ状	107	83	28	
P79	上層	ピット	O W20-20	楕円形	橢状	レンズ状	112	79	49	
P80	上層	ピット	O W20-17・18・22・23	楕円形	台形状	水平状	65	52	26	
P81	上層	ピット	O W20-17	円形	半球状	水ギンズ	65	50	31	
P82	上層	ピット	O W19-15	楕円形	半円状	柱頭	88	72	30	
P83	上層	ピット	O W19-15	楕円形	半円状	レンズ状	[65]	63	25	
P84	上層	ピット	O W8	楕円形	半球状	レンズ状	60	45	19	
P85	上層	ピット	O W20-22	円形	台形状	單層	65	63	24	
P86	上層	ピット	O W21-2	円形	台形状	水平状	72	70	26	
P87	上層	ピット	O W19-25	円形	半円	柱頭	55	46	22	
P88	上層	ピット	O W20-5	円形	台形	單層	43	42	22	
P89	上層	ピット	O W20-14	楕円形	半円状	レンズ状	64	47	22	
P90	上層	ピット	O W18-25	[円形]	台形状	單層	[62]	[29]	[34]	
S K1014	下層	土坑	O W20-7・12	円形	U字状	水平状	109	83	37	
S S1015	下層	集石遺構	O W19-9・14	[楕円形]	浅いV字状	單層	105	50	10	
S S1016	下層	集石遺構	O X19-6・7・11-12	—	浅いV字状	單層	153	100	8	
S S1017	下層	集石遺構	O X18-23・24	[楕円形]	浅いV字状	單層	265	172	10	
S S1018	下層	集石遺構	O X18-12・13・17・18	[楕円形]	浅いV字状	單層	240	[116]	10	
S S1019	下層	集石遺構	O X19-16	[楕円形]	浅いV字状	單層	90	60	8	
S S1020	下層	集石遺構	O W20-5	[楕円形]	浅いV字状	レンズ状	136	83	18	
P1021	下層	ピット	O W19-15	楕円形	半円状	レンズ状	50	35	12	
P1022	下層	ピット	O W19-15	円形	半円状	レンズ状	45	42	12	
P1023	下層	ピット	O X19-3	円形	台形状	レンズ状	42	40	20	
P1024	下層	ピット	O X19-3	円形	台形状	レンズ状	42	32	10	
P1025	下層	ピット	O X19-6	円形	U字状	單層	65	54	38	
P1026	下層	ピット	O W19-15	円形	V字状	單層	27	26	21	
P1027	下層	ピット	O W19-10	楕円形	V字状	鉛錠	43	35	23	
P1028	下層	ピット	O W19-8	円形	—	—	—	—	—	
P1029	下層	ピット	O W19-8・13	楕円形	半円状	單層	47	38	11	
P1030	下層	ピット	O W19-14	円形	半円状	單層	28	25	13	S I 1009
P1031	下層	ピット	O W19-14	楕円形	U字状	單層	30	27	21	S I 1009
P1032	下層	ピット	O W19-18	円形	半円状	單層	36	35	13	S I 1009
P1033	下層	ピット	O W19-23	楕円形	半円状	單層	32	23	13	> S I 1009
P1034	下層	ピット	O W19-22	楕円形	V字状	單層	37	24	15	
P1035	下層	ピット	O W20-4・5	円形	半円	柱頭	44	40	25	
P1036	下層	ピット	O W19-22	円形	台形相接	レンズ状	25	22	12	
P1037	下層	ピット	O X19-17	円形	段状	單層	28	25	17	
P1038	下層	ピット	O X19-17	楕円形	U字状	單層	20	15	26	
P1039	下層	ピット	O X16-16・17	円形	半円状	單層	22	21	10	S B1005
P1040	下層	ピット	O X19-22	円形	U字状	單層	26	22	19	S B1005
P1041	下層	ピット	O X19-22	円形	U字状	單層	27	25	19	S B1005
P1042	下層	ピット	O X19-21・22	円形	半円状	單層	27	22	8	
P1043	下層	ピット	O X20-1・8	円形	台形状	レンズ状	35	31	11	
P1044	下層	ピット	O X20-6・7	円形	半円状	レンズ状	35	32	14	S I 1011
P1045	下層	ピット	O X18-19	楕円形	半円状	單層	50	38	9	
P1046	下層	ピット	O X18-14・19	円形	台形状	單層	37	34	13	
P1047	下層	ピット	O W19-5	円形	半円状	單層	30	25	10	
P1048	下層	ピット	O W19-4	円形	台形状	單層	24	24	14	
P1049	下層	ピット	O W20-22	円形	半円状	單層	37	35	17	
P1050	下層	ピット	O W20-23	楕円形	半円状	單層	23	14	10	
P1051	下層	ピット	O X20-7	楕円形	台形状	單層	28	25	14	S I 1011

遺構観察表（上・下層）(3)

報告号	調査区	種別	グリッド	形状	断面	質土	法規			備考
							長径(cm)	対角(cm)	深さ(cm)	
P1052	下層	ピット	OX20-7	楕円形	U字状	堅硬	42	34	28	S 11011
P1053	下層	ピット	OW19-24	楕円形	U字状	堅硬	22	15	13	
P1054	下層	ピット	OX19-13+18	円形	U字状	レンズ状	17	17	14	
P1055	下層	ピット	OW19-9	円形	台形状	堅硬	30	26	10	
P1056	下層	ピット	OW21-4	円形	U字状	堅硬	42	38	30	
P1057	下層	ピット	OX20-6	円形	楕円形	堅硬	28	28	9	
P1058	下層	ピット	OX20-6	円形	U字状	堅硬	23	22	12	
P1059	下層	ピット	OX19-12	円形	U字状	堅硬	20	16	32	
P1060	下層	ピット	OW18-25	円形	平内斜	堅硬	28	28	10	
P1061	下層	ピット	OW19-4+9	円形	平内斜	レンズ状	44	43	18	
P1062	下層	ピット	OW19-8+9+13+14							
P1063	下層	ピット	OW20-10	円形	台形状	堅硬	28	24	10	
P1064	下層	ピット	OW20-10	円形	台形状	鉛直	30	26	10	
P1065	下層	ピット	OX19-21	円形	U字状	堅硬	25	23	16	S B 1005
P1066	下層	ピット	OX19-21	楕円形	U字状	レンズ状	35	23	11	S B 1005
P1067	下層	ピット	OX19-16	円形	平内斜	堅硬	28	28	10	
P1068	下層	ピット	OW19-19	楕円形	平内斜	堅硬	20	17	12	S 11009
P1069	下層	ピット	OX19-21	円形	U字状	堅硬	25	25	22	S B 1005
P1070	下層	ピット	OX20-2	楕円形	楕状	堅硬	33	23	11	
P1071	下層	ピット	OX20-7	楕円形	U字状	レンズ状	[25]	27	22	S 11011
P1072	下層	ピット	OW20-8	円形	台形状	堅硬	22	17	7	
P1073	下層	ピット	OW20-7+8	円形	平内斜	堅硬	23	20	11	S 11013
P1074	下層	ピット	OW20-18	円形	U字状	堅硬	15	15	21	
P1075	下層	ピット	OW20-18	円形	U字状	堅硬	15	13	16	
P1076	下層	ピット	OW20-17	楕円形	平内斜	堅硬	23	19	9	
P1077	下層	ピット	OX20-11	円形	平内斜	堅硬	22	20	14	
P1078	下層	ピット	OW20-14+15	円形	圓柱状	堅硬	35	30	16	

土器觀察表（下層・上層）

No.	編號	地點	形狀	底面	口沿	盤上	外觀形狀	內觀形狀	圖 名
1	O.XH.17	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。文，圓底之。	外觀圓形 內觀圓形	圖4
2	5.IX.007	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖5
3	O.XH.18	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖6
4	5.IX.02	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖7
5	O.WD.10	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖8
6	O.WD.10	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖9
7	O.WD.2	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖10
8	O.WD.20	II.14.05~14.06	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖11
9	O.WD.20	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖12
10	O.XH.18	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖13
11	O.XH.18	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖14
12	O.XH.12~18	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖15
40	5.167	II.14.05~14.06	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖16
41	O.WD.17	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖17
42	O.WD.17	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖18
43	O.WD.7	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖19
44	5.K69	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖20
45	O.WD.18	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖21
46	O.WD.22	II.14.05~14.06	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖22
47	5.K69	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖23
48	O.WD.17	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖24
49	O.WD.5	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖25
50	O.WD.23	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖26
51	O.XZ.13	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖27
52	O.WD.5	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖28
53	O.WD.23	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖29
54	O.WD.23	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖30
55	O.WD.17	II.14.05	圓底盤	略凹	平	—	外觀圓形，邊緣之。(底 內觀圓形，底面有細紋，無刮痕之。)	外觀圓形 內觀圓形	圖31

観察表

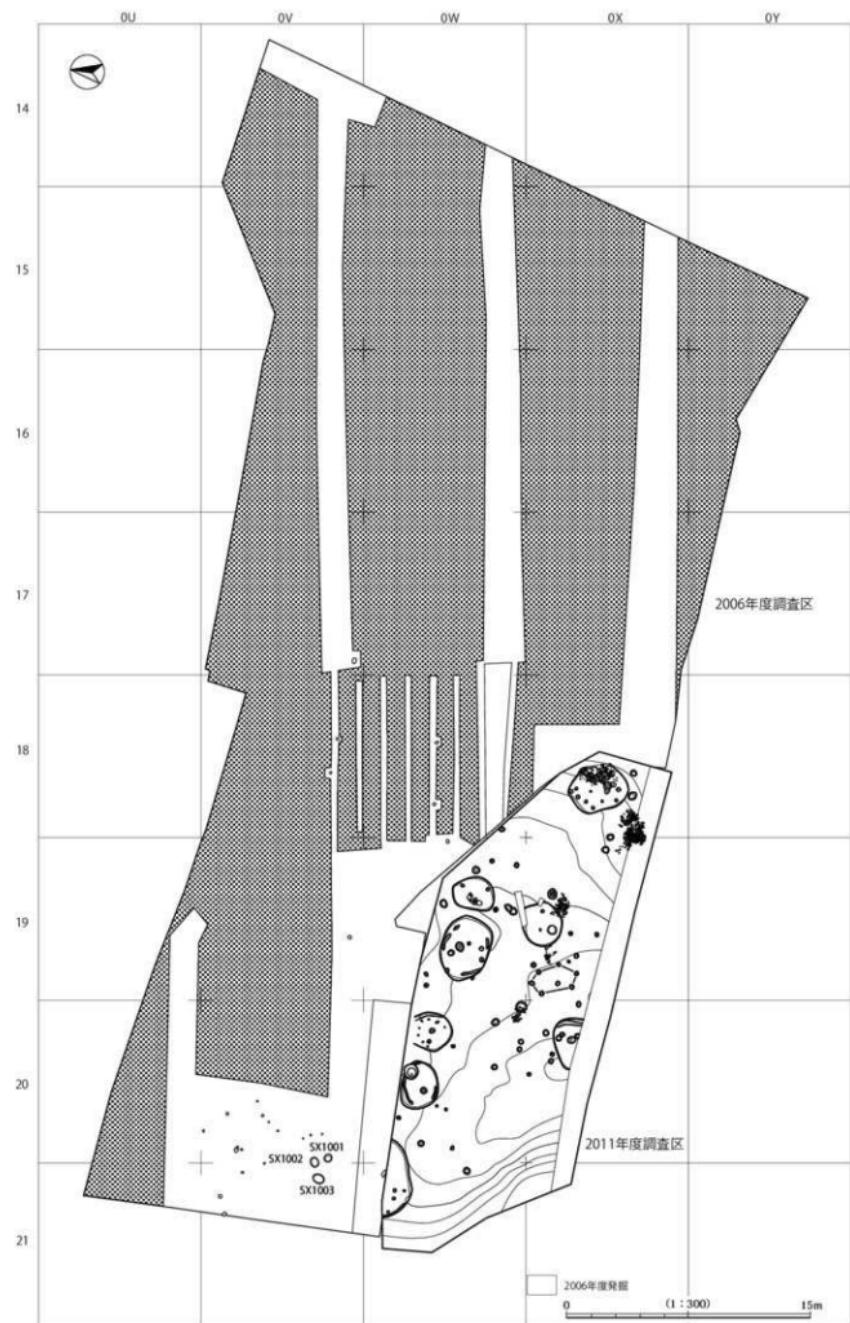
石器観察表（下層）

報告番号	種別	石材	出土位置			貢送者	幅	厚さ	重さ (kg)	遺存状態	備考	
			遺跡	層位	グリッド							
13	石器	貝岩	V	OX 19	16	64	21	6	9.6	完形品	つまみ付	
14	石器	貝岩	V	OX 18	21	63	22	8	10.1	完形品	つまみ付	
15	石器	海綿貝	V	OX 19	11	51	28	3	4	完形品	つまみ付	
16	不定形石器	海綿貝	V	OX 19	22	55	39	14	26.2	欠損品	遺物的調査	
17	不定形石器	貝岩	V	OX 20	4	48	52	16	24.0	欠損品	遺物的調査	
18	不定形石器	貝岩	V	OW 21	3	51	65	23	51.4	欠損品	遺物的調査	
19	不定形石器	貝岩	V	OW 20	15	58	64	16	51.3	欠損品	遺物的調査	
20	不定形石器	安山岩	V	OX 19	11	92	47	12	54	破片	遺物的調査	
21	不定形石器	貝岩	V	OW 20	15	70	30	15	20.2		不規則的調査	
22	不定形石器	海綿貝	V	OW 20	22	34	33	10	9.3		不規則的調査	
23	不定形石器	貝岩	V	OX 19	7	79.0	39.0	15.0	46.6		不規則的調査	
24	不定形石器	貝岩	V	OW 20	3	73.0	44.0	17.0	44.2		使用歴あり	
25	不定形石器	貝岩	V	OW 20	5	149	100	41	590.0		遺物的調査	
26	圓状石器	海綿貝	SII1006	墳土	OW 21	1+2+6+7	103	46	23	83	完形品	
27	圓状石器	海綿貝	VI	OW 21	3	73	45	20	52	完形品		
28	石錐	凝灰岩	V	OX 18	22	70	73	16	108		両端打球	
29	董石	閃緑岩	V	OX 20	11	85	77	40	320.0			
30	董石	閃緑岩	V	OX 20	11	110	57	27	240.0			
31	董石	貝岩	V	OX 19	25	83	88	38	390.0			
32	董石	凝灰岩	SII1006	墳土	OW 21	1+2+6+7	120	62	33	274.0		同じ時代のものか
33	董石	安山岩	P1027	墳土	OW 19	9	91	60	24	296.0		
34	董石	安山岩	V	OX 20	11	116	97	41	675.0		下端に剥離	
35	董石	花崗岩	V	OW 19	10	101	83	40	570.0		下端に剥離	
36	石錐?	安山岩	SII1006	墳土	OX 19	6	292	183	42	3200.0		
37	石錐?	安山岩	SS3015	V	OW 19	9+14	173	226	75	3600.0		
38	石錐	花崗岩	SS3015	V	OW 19	9+14	233	288	72	6300.0		打球面あり
39	石錐	凝灰岩	V	OX 20	2	49	77	35	121.5			

石器観察表（上層）

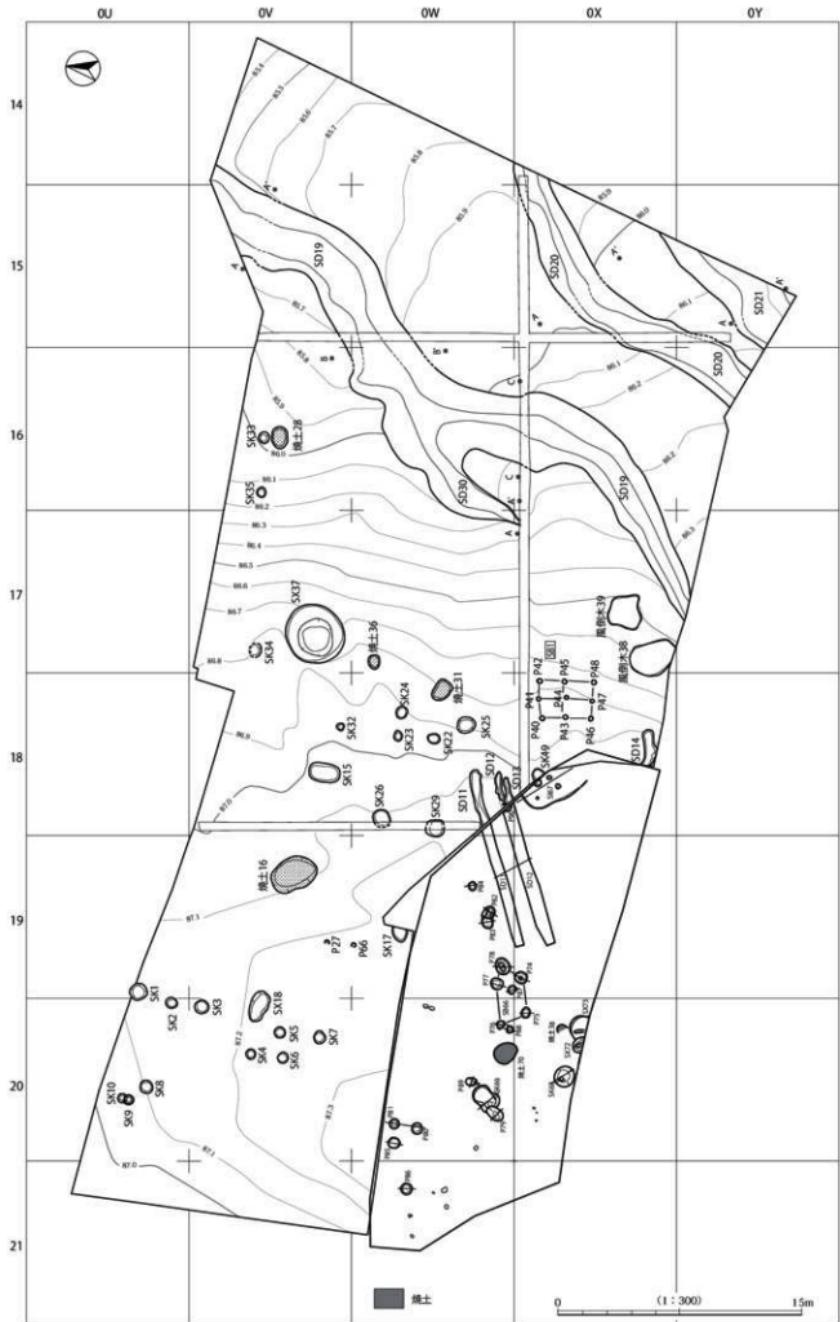
報告番号	種別	石材	出土位置			貢送者	幅	厚さ	重さ (kg)	遺存状態	備考	
			遺跡	層位	グリッド							
56	不定形石器	貝岩	II	OW 20	23	97	66	20	88.5		遺物的調査	
57	不定形石器	貝岩	II	OW 19	5	86	55	18	78.1		遺物的調査	
58	不定形石器	海綿貝	III	OW 20	9	60	39	10	28	片側斜に剥離	不規則的調査	
59	不定形石器	貝岩	III	OW 19	19	76	44	12	41.0		不規則的調査	
60	不定形石器	海綿貝	III	OW 19	23	98	69	30	160.3		遺物的調査	
61	不定形石器	海綿貝	III	OW 20	81	50	27	98.0			不規則的調査	
62	不定形石器	海綿貝	III	OW 20	79	36	23	47.0			不規則的調査	
63	不定形石器	黄白英(黄)	III	OX 20	80	53	12	64			不規則的調査	
64	不定形石器	貝岩	III	OW 19	25	73	70	15	85.0		不規則的調査	
65	不定形石器	貝岩	SK009	墳土	OW 20	20	69	52	21	52.8		不規則的調査
66	不定形石器	砂岩(貝岩)	SK07	墳土	OX 18	12+16+17	47.0	46.0	8.0	12.7		使用歴あり
67	不定形石器	海綿貝	SK07	墳土	OX 18	12+16+17	52.0	45.0	8.0	16.6		使用歴あり
68	不定形石器	貝岩	III	OW 20	8	103	75	25	143.0		遺物的調査	
69	網狀石斧	凝灰岩(貝岩)	SK07	OW 20	25	67	35	10	32			
70	網狀石斧	海綿貝	SK07	墳土	OX 18	12+16+17	100	44	24	171		
71	網狀石斧	海綿貝	SK	OW 20	5	97	110	44	754.0		一面に剥離	
72	董石	貝岩	SK	OW 20	10	114	143	55	767.0			
73	董石	半花崗岩	SK	OW 20	20	117	70	27	330.0			
74	董石	綠色凝灰岩	SK	OX 20	16	146	99	50	600.0			
75	董石	安山岩	SK	OX 19	18	120	73	58	720.0			
76	石器	危険貝	SK07	墳土	OX 18	12+16+17	182	223	58	2750.0		
77	石核	貝岩	SK	OW 20	24	64	71	28	125.0			
78	石核	海綿貝	SK	OX 20	8	80	83	55	480.0			
79	角形石器	綠色凝灰岩	SK	OX 19	11	58	45	20	33.0	圓錐尖端		
80	角形石器	綠色凝灰岩	SK	OW 20	20	45	78	18	50.0	未製品		
81	角形石器	綠色凝灰岩	SK	OW 20	20	73	65	18	45.0	未製品		
82	角形石器	綠色凝灰岩	SK	OX 19	5	43	78	22	50.0	圓錐尖端		
83	角形石器	綠色凝灰岩	SK	OX 20	21	50	47	12	25.0	欠損品		
84	角形石器	綠色凝灰岩	SK	OW 20	91	93	30	21.0	圓錐尖端			
85	角形石器	貝岩	SK	OW 21	4	123	122	13	227.0	軸状		
86	角形石器	綠色凝灰岩	SK	OW 20	46	32.2	76	10.0	46.0			

図 版



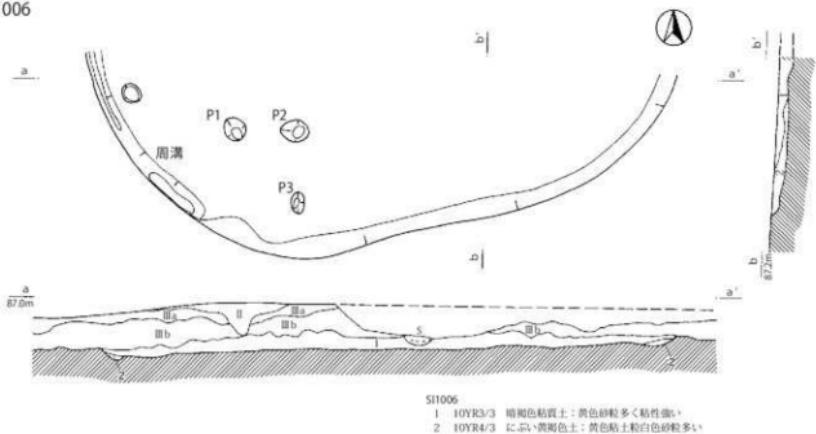
図版 2

2006・2011 年度調査区（上層）

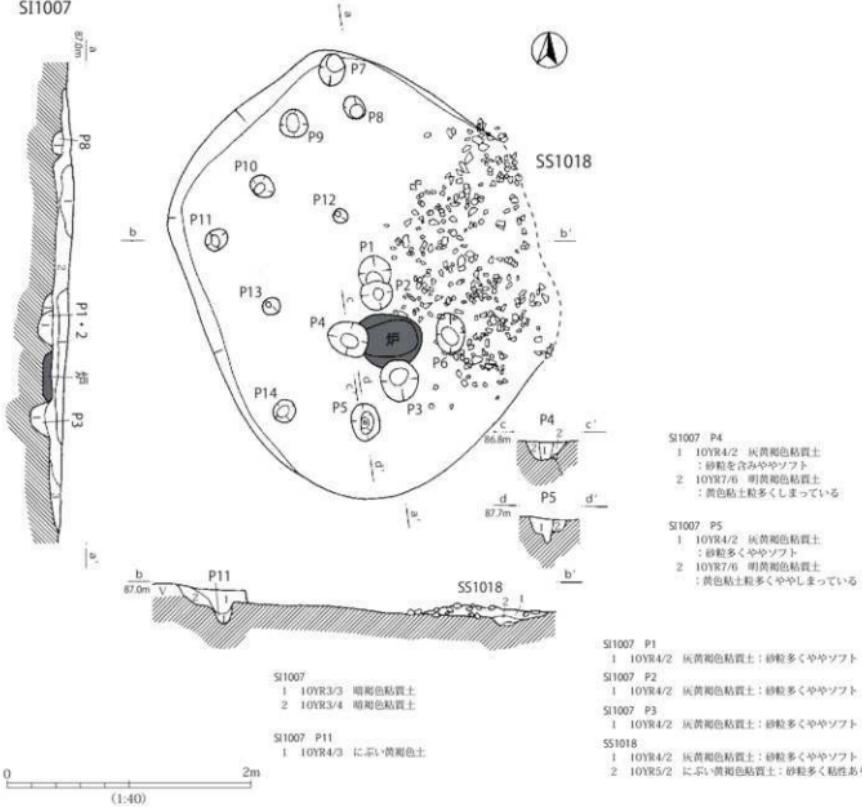




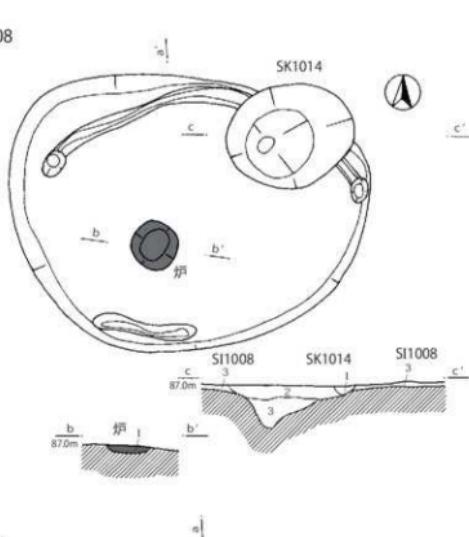
SI1006



SI1007



SI1008



SI1008

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土 : V層に対比
- 2 10YR4/3 にぶく黄褐色粘質土
: 小礫を含み粘性しまりあり
- 3 10YR4/2 灰褐色粘質土
: 細粒多く粘性しまりあり

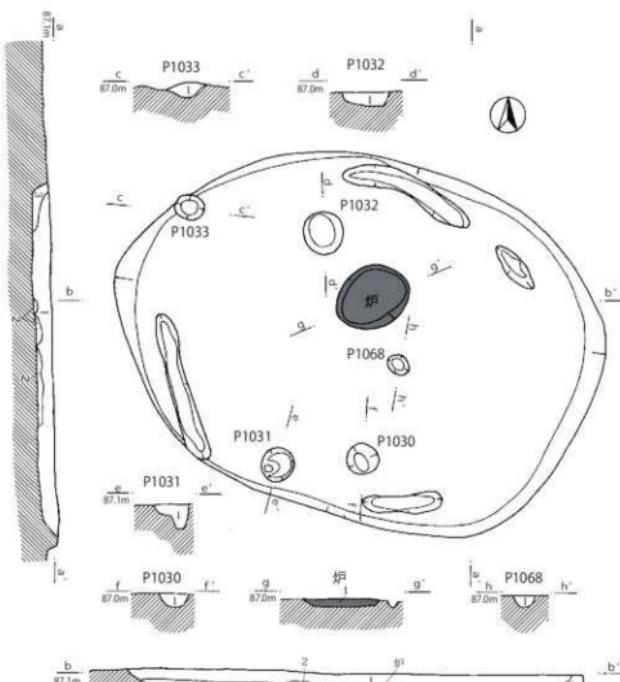
SI1008 壁

- 1 10YR4/6 褐色土
: 硬土粒が少々ややソフト

SK1014

- 1 10YR3/2 黑褐色土 : V層に対比
- 2 10YR4/3 にぶく黄褐色粘質土
: 細石粒が多量。粘性しまりあり
- 3 10YR4/2 灰褐色砂質土
: 細粒多くややソフト

SI1009



SI1009

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土
: 黄色砂粒多量。ややしまりあり
- 2 10YR4/3 にぶく黄褐色粘質土
: 細石粒を含み粘性・しまりあり
- 3 10YR5/3 にぶく黄褐色粘質土
: 白色砂粒多量。ザラつく

SI1009 壁

- 1 10YR4/4 褐色粘質土
: 硬土粒少借。粘性・しまりなし

P1030

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土
: 黄色砂粒多量。粘性・しまり

P1031

- 1 10YR4/3 にぶく黄褐色粘質土
: 細石粒多倍。粘性・しまり

P1032

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土
: 黄色砂粒多量。粘性・しまり

P1033

- 1 10YR5/4 にぶく黄褐色粘質土
: 白色砂粒少借。粘性・しまり

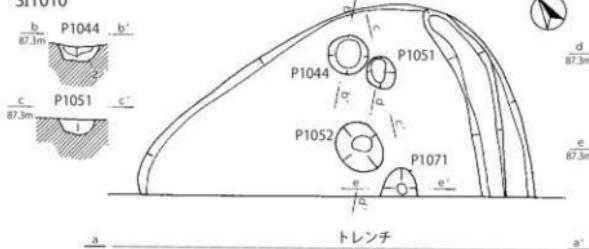
P1068

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土
: 黄色砂粒多量。粘性・しまり

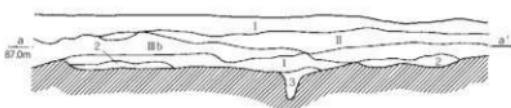
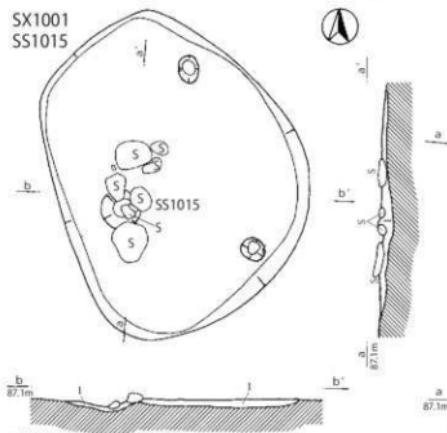
図版 6

遺構個別図(3)下層 窒穴住居・竪穴様遺構

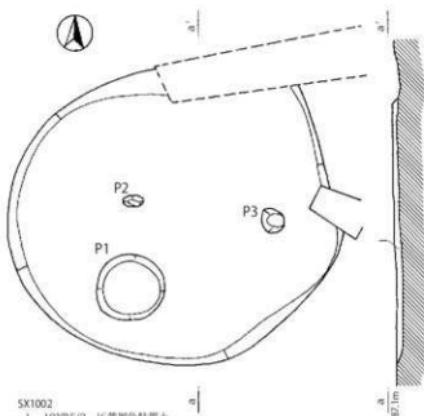
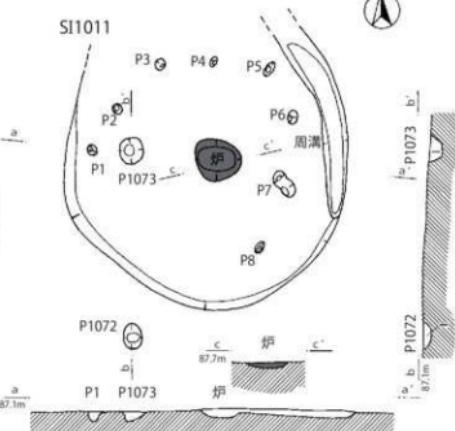
SI1010



トレンチ

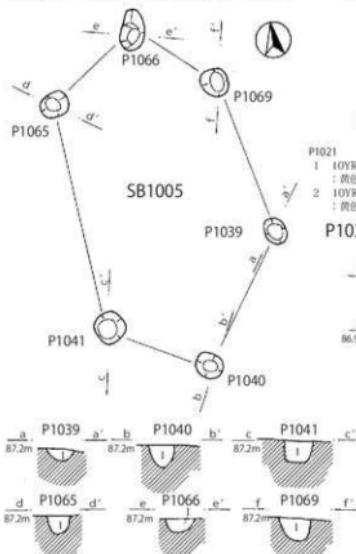
SX1001
SS1015SX1001
1 10YR4/2 灰褐色粘質土：灰褐色粘土粒が多く、粘性・しまりあり

SX1002

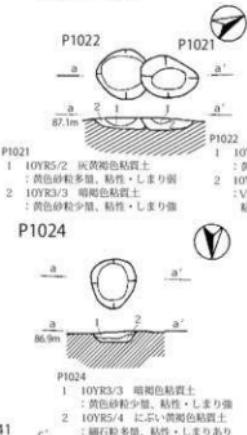
SX1002
1 10YR5/2 灰褐色粘質土0 2m
(1:40)

造構個別図(4) 下層 挖立柱建物・ピット・集石遺構

P1039～1041・1065・1066・1069



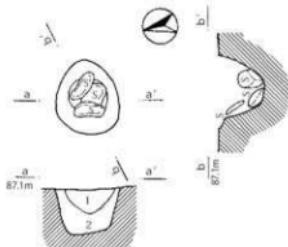
P1021・1022



P1023



P1025



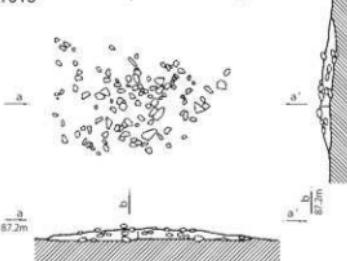
P1025

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱
2 10YR3/3 明褐色粘質土
: V層より細石粒が少量、
粘性・しまり弱

- P1039
1 10YR3/3 明褐色粘質土
: 黄色砂粒少量、粘性・しまり強
P1040
1 10YR2/3 黑褐色粘質土
: V層より細石粒が少量、粘性・しまり弱
P1041
1 10YR3/3 明褐色粘質土
: V層より細石粒が少量、粘性・しまり弱

- P1065
1 10YR3/3 明褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強
P1066
1 10YR3/3 明褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強
P1069
1 10YR3/3 明褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強

SS1016



- SS1016
1 10YR4/2 黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

SS1019



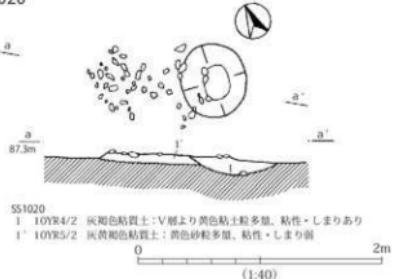
- SS1019
1 10YR4/2 黄褐色粘質土：V層より黄色粘土粒多量、粘性・しまりあり
1' 10YR5/2 黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

SS1017



- SS1017
1 10YR4/2 黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

SS1020



- SS1020
1 10YR4/2 黄褐色粘質土：V層より黄色粘土粒多量、粘性・しまりあり
1' 10YR5/2 黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

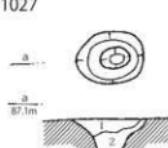
P1026



P1026

- 1 IOYR3/3 噴褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い。
2 IOYR4/3 にぶい噴褐色粘質土：細石粒多量、粘性・しまりあり

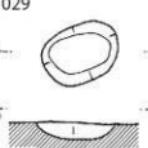
P1027



P1027

- 1 IOYR3/3 噴褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い。
2 IOYR4/3 にぶい噴褐色粘質土：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1029



P1029

- 1 IOYR3/3 噴褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い。
2 IOYR4/3 にぶい噴褐色粘質土：細石粒多量、粘性・しまりあり

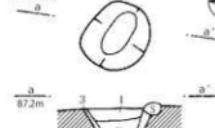
P1034



P1034

- 1 IOYR3/3 噴褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い。

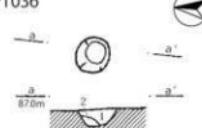
P1035



P1035

- 1 IOYR4/2 黄褐色粘質土：V削より磁石粒多量、粘性・しまりあり
2 IOYR4/2 黄褐色粘質土：1より粘性・しまり弱い。
3 IOYR4/3 にぶい黄褐色粘質土：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1036



P1036

- 1 IOYR3/3 噴褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い。
2 IOYR4/3 にぶい噴褐色粘質土
：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1037



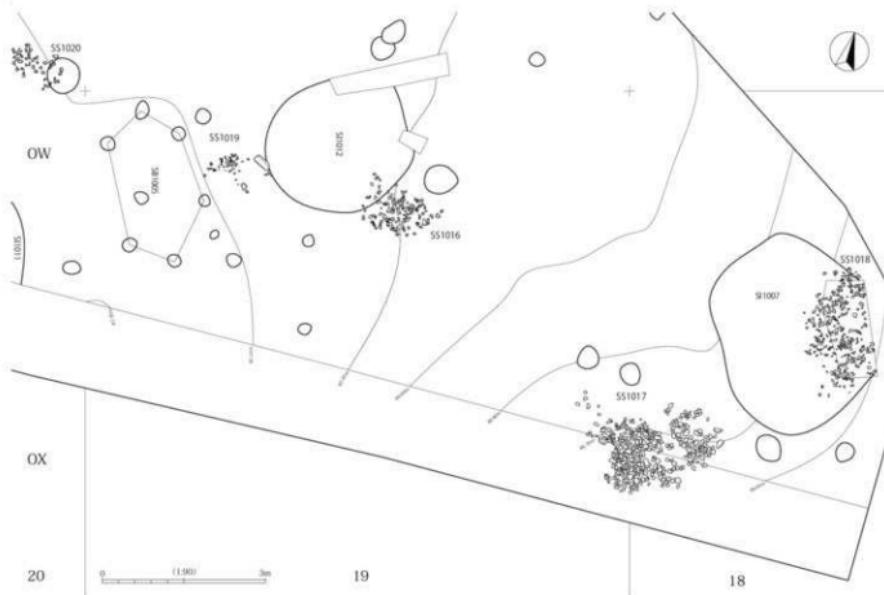
P1037

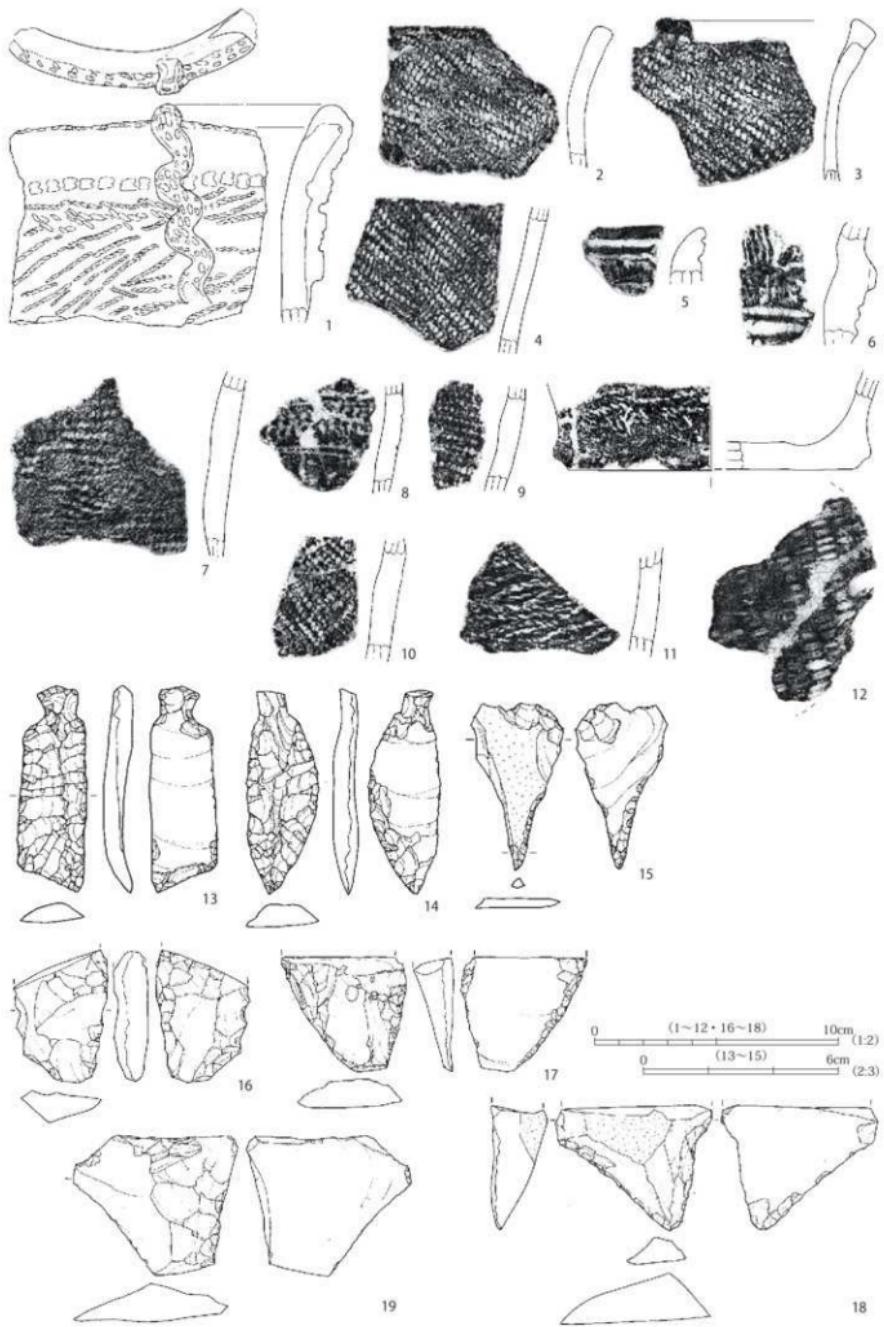
- 1 IOYR3/3 噴褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い。

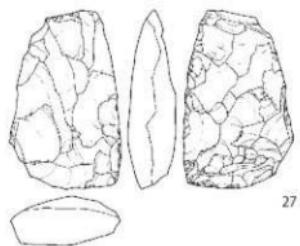
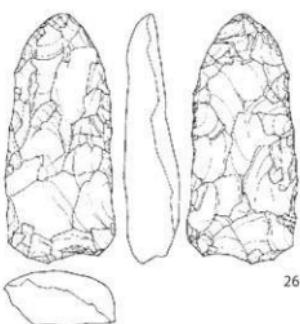
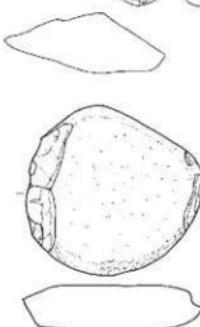
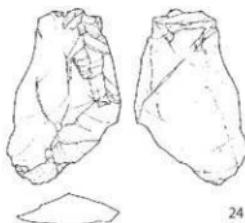
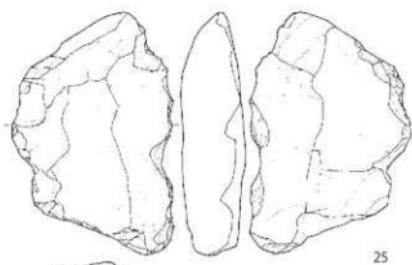
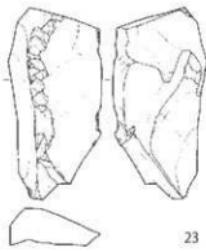
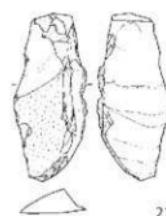
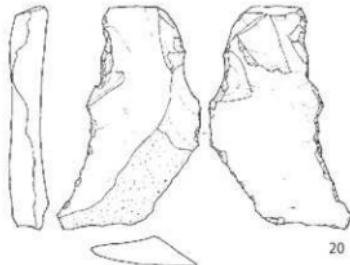


- P1078
1 IOYR4/3 にぶい噴褐色粘質土
：細石粒多量、粘性・しまりあり

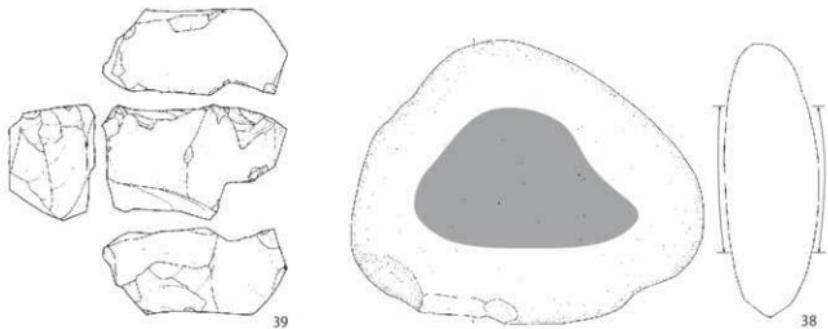
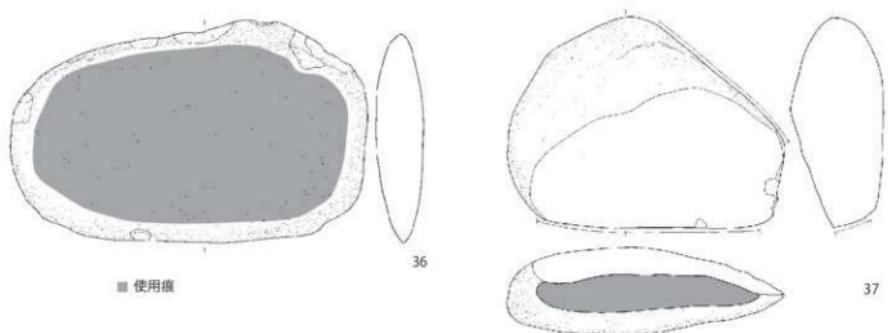
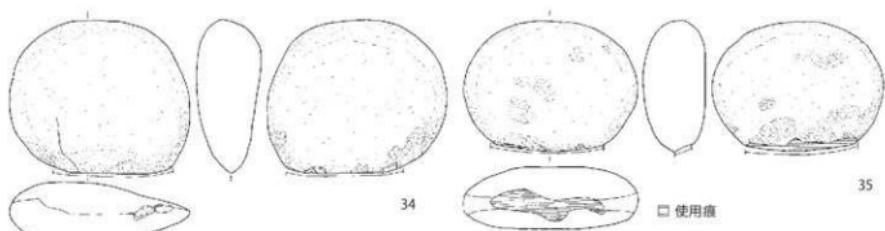
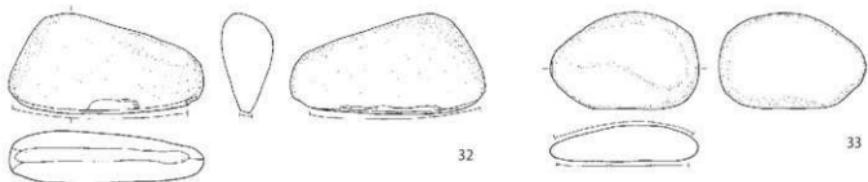
0 (1:20) 1m







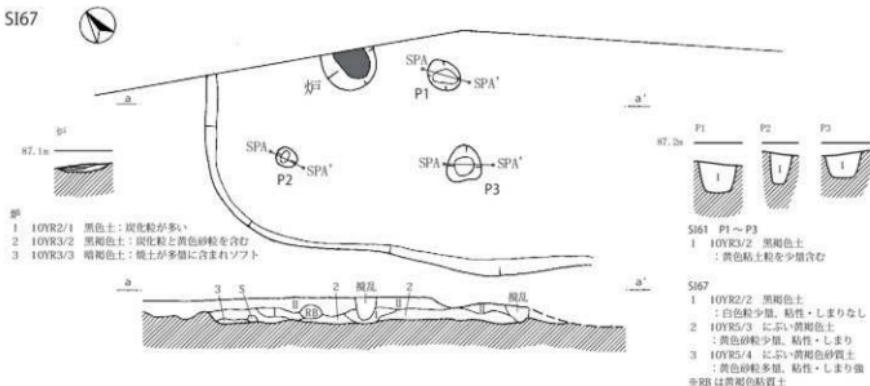
0 (20~24・26・27) 10cm (1:2)
0 (25・28~31) 15cm (1:3)



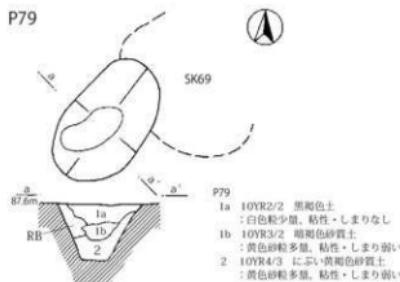


遺構個別図 (1) 上層 穂穴住居・土坑・ピット

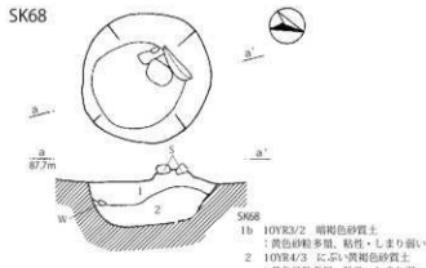
SI67



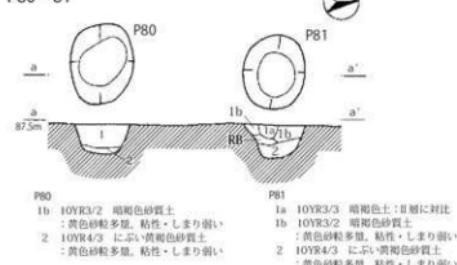
P79



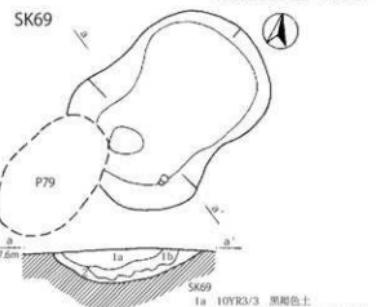
SK68



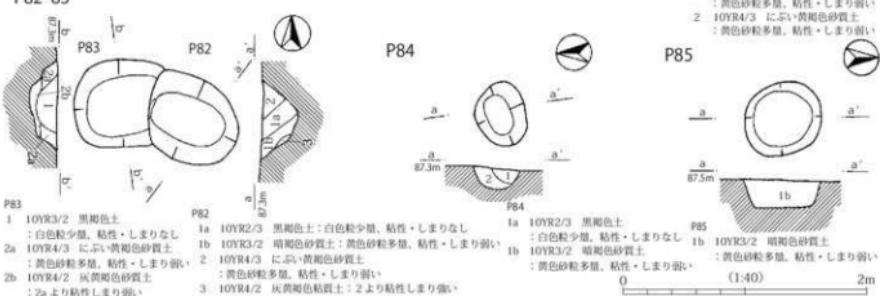
P80・81



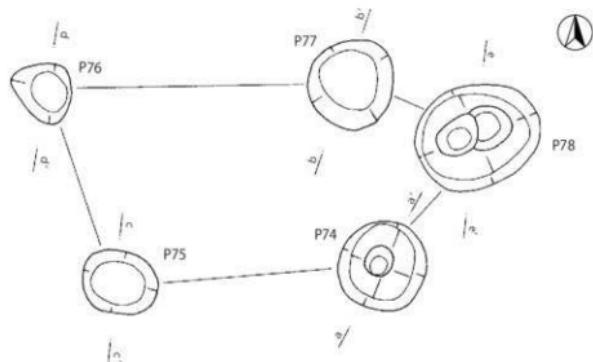
SK69



P82・83



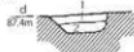
SB66



P75



P76



- P75
1 10YR3/4 喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2 10YR5/3 に似る・喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
- P76
1 10YR3/4 喜潤色土: II層に対比
2 10YR5/3 に似る・喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P74

- 1 10YR3/2 黒褐色土
: 白色粉少量、粘性・しまりなし
2 10YR3/3 喜潤色土: II層に対比
3 10YR3/4 喜潤色土
: より粘質、しまりあり
4 10YR3/3 に似る・喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P74



P77

- 1 10YR3/4 喜潤色土: II層に対比
2 10YR5/3 に似る・喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

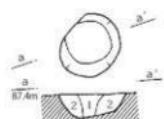
P77



P78



P87



- P87
1 10YR5/3 に似る・喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2 10YR3/3 喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P88



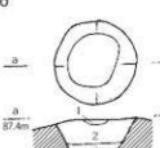
- P88
1 10YR3/4 喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P90



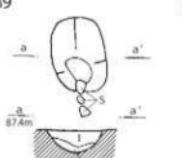
- P90
1 10YR3/3 喜潤色土

P86



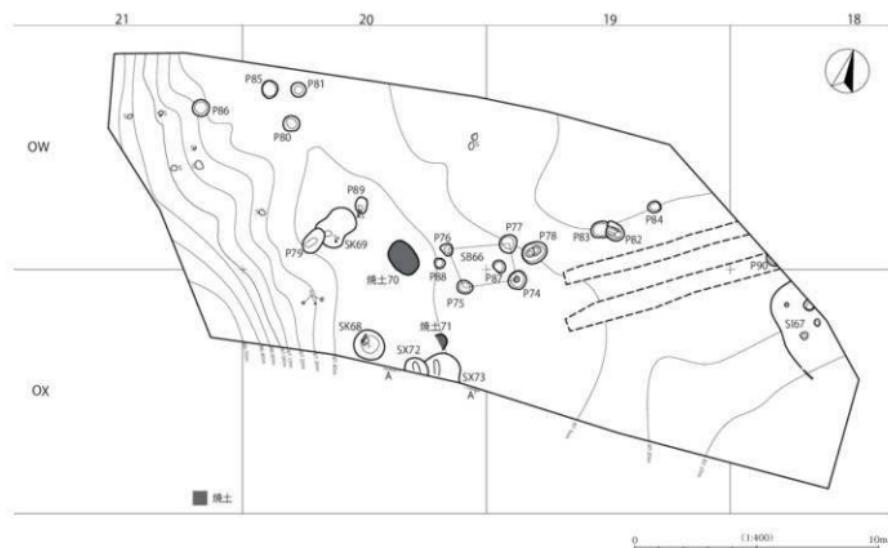
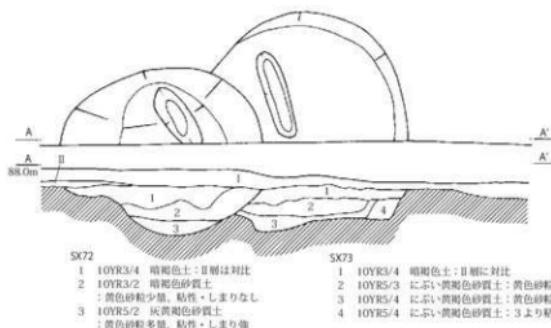
- P86
1 10YR3/2 喜潤色土: II層に対比
2 10YR4/3 に似る・喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
3 10YR4/2 底喜潤色砂質土
: より粘性・しまり弱い

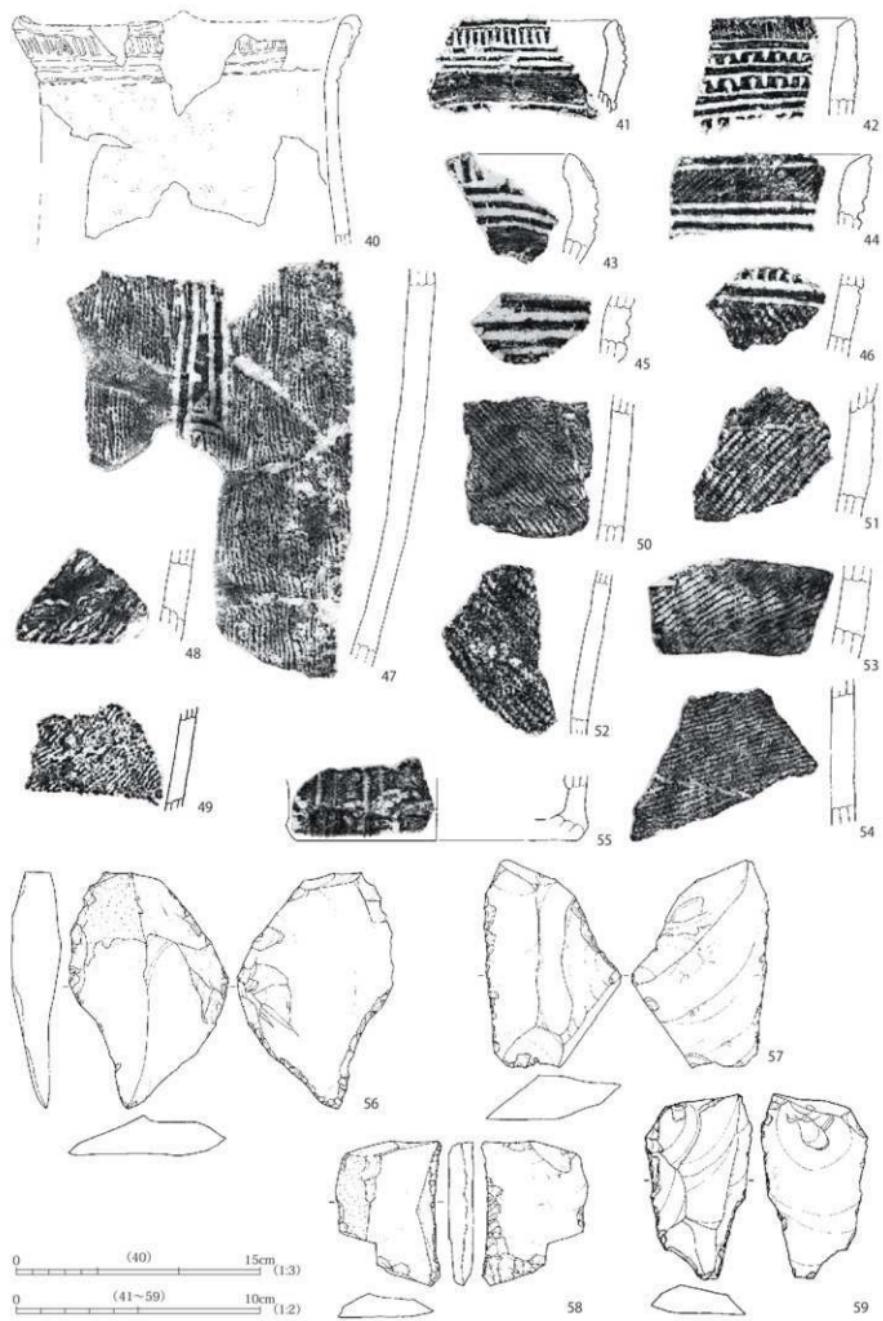
P89

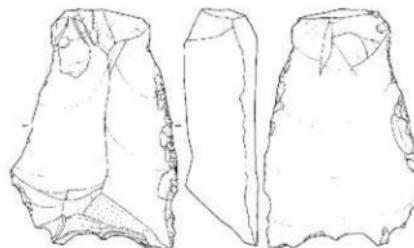


- P89
1 10YR3/4 喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2 10YR4/3 に似る・喜潤色砂質土
: 黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

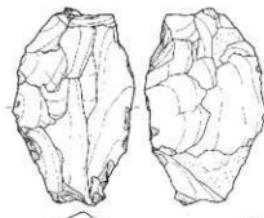
0 (1:40) 2m







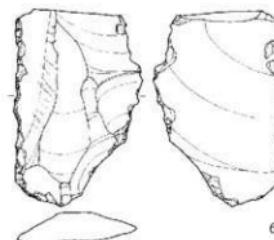
60



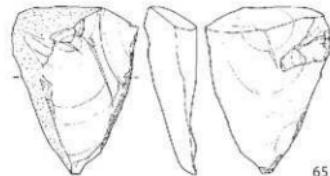
61



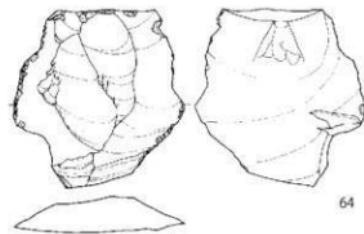
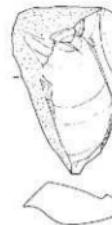
62



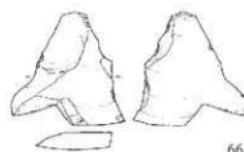
63



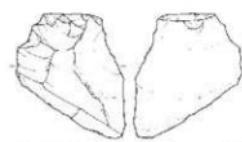
65



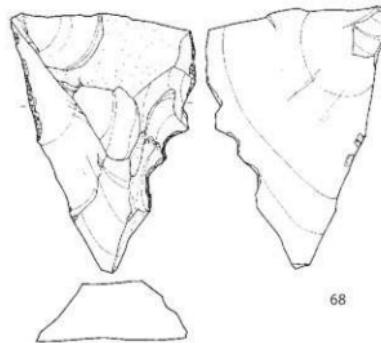
64



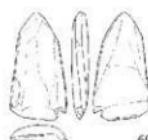
66



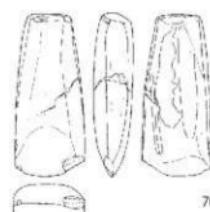
67



68



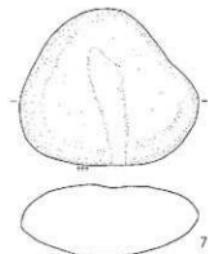
69



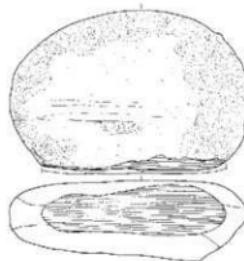
70

0 (60~68) 10cm (1:2)

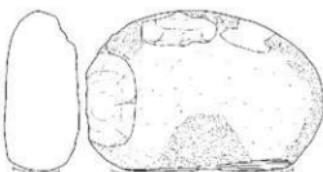
0 (69+70) 15cm (1:3)



71

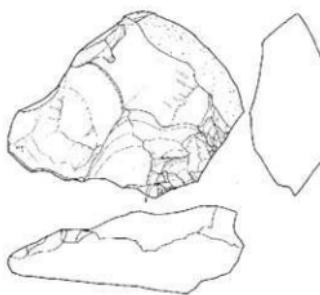


72

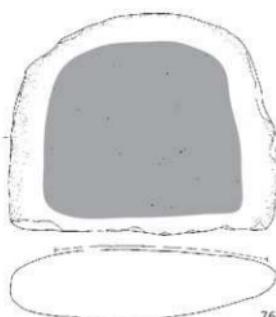


73

□ 使用痕



74

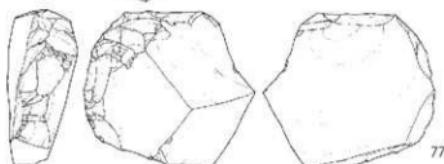


75

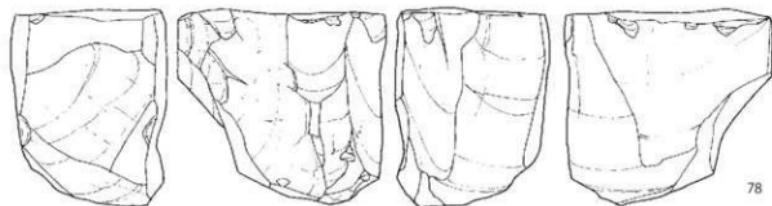
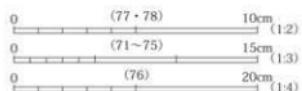
■ 使用痕



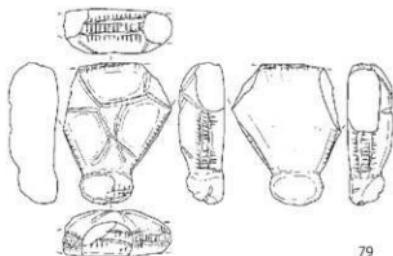
76



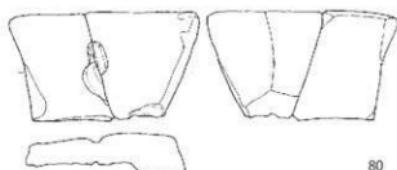
77



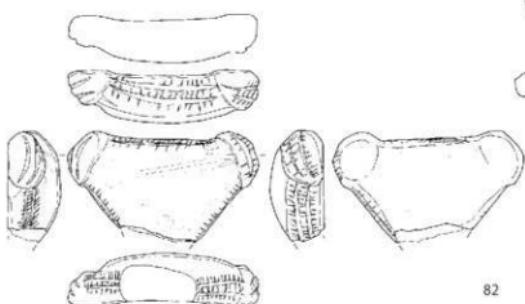
78



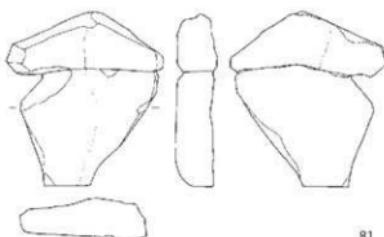
79



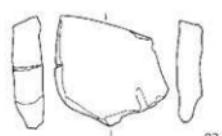
80



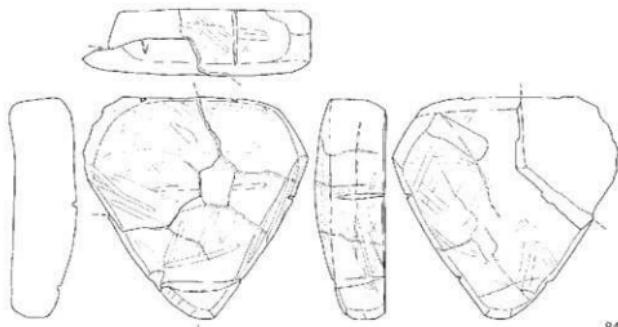
81



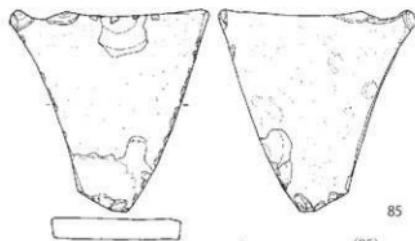
82



83

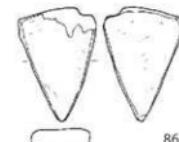


84



85

0 (85) 15cm (1:3)

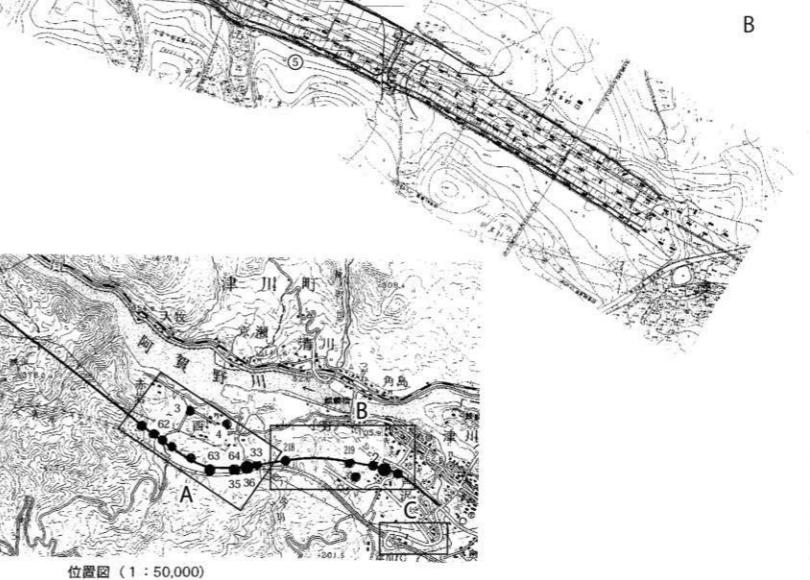
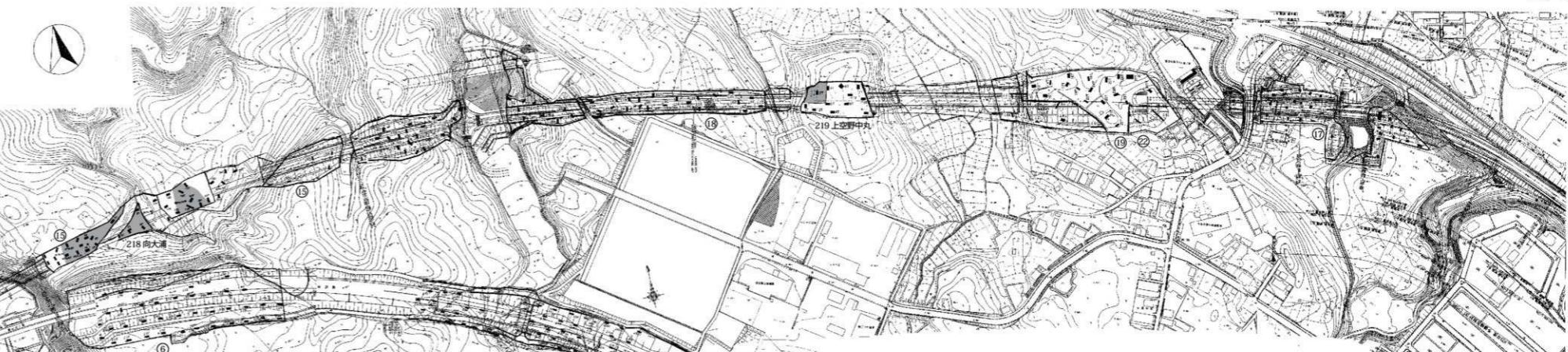
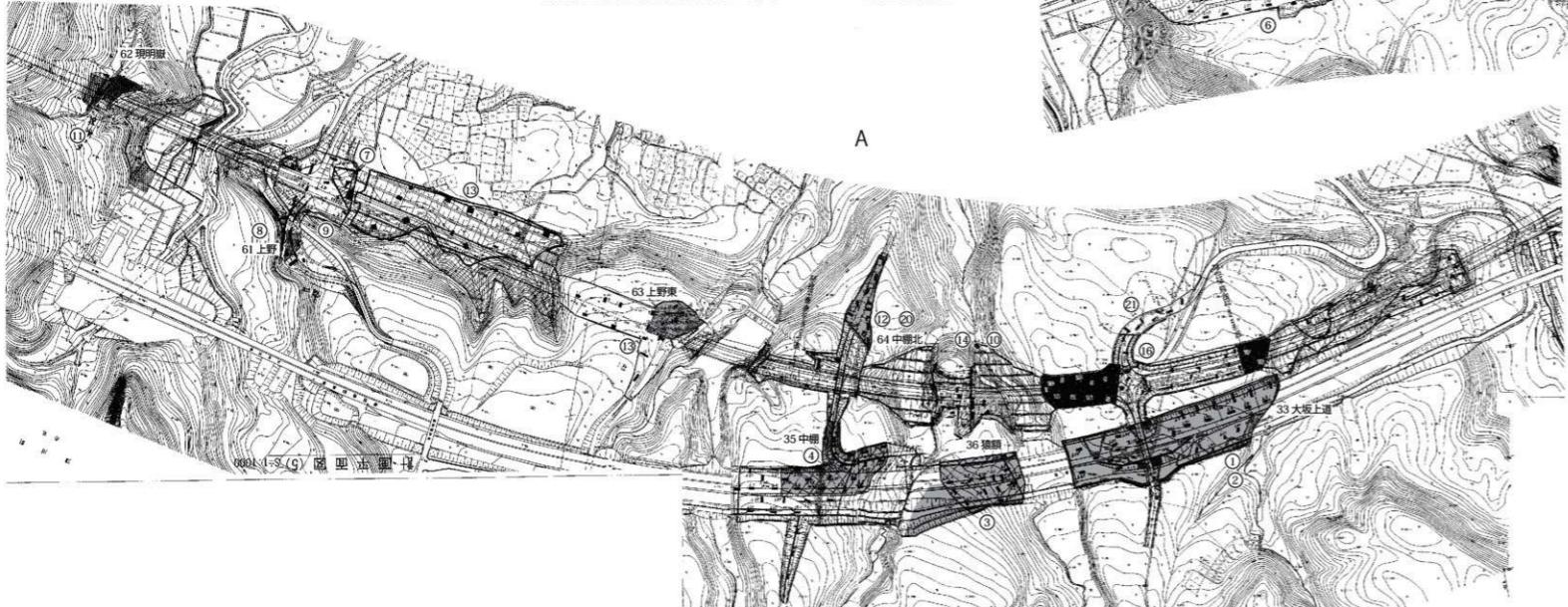


86

0 (79~84・86) 10cm (1:2)



3 六角原	縄文中期～後期・平安	36 猿額	縄文前期～中期
4 宮野	縄文中期～後期	61 上野	縄文前期～後期
5 赤岩	縄文中期～晚期	62 規明塚	縄文前期～後期
32 今井野	縄文	63 上野東	縄文前期～後期・平安
33 大坂上道	縄文前期～晚期・平安	64 中標北	縄文
35 中標	縄文前期～中期	218 向大浦	
○付数字はP3第1表の試掘確認調査の順位に一致する (数字は町道番号)			



C



遠跡遠景（南上空から）(→の交点が調査区) 上：阿賀野川（左が下流）、阿賀町西集落



遠景（東上空から）掲川改良工事と右：磐越自動車道（福島方面を望む）



下層完掘（真上から）



三角形岩版（上層出土）



遠景（西上空から）



調査前 調査区近景（西方から：破線は調査範囲）



基本層序1（南壁セクション）



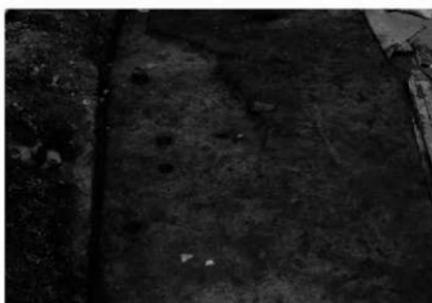
基本層序2（南壁セクション）



SB1005 実掘（北方から）



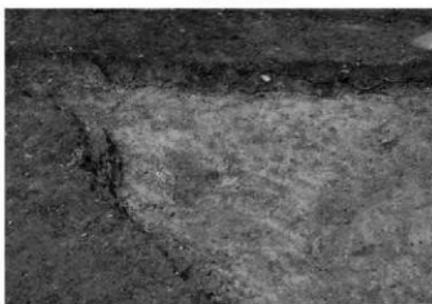
SI1006 完掘（南方から）



SI1006 完掘（西方から）



SI1006 東端東西セクション（南方から）



SI1006 南端南北セクション（東方から）



SI1007 完掘 1（南方から）



SI1007 完掘 2（北方から）



SI1007 南端南北セクション（西方から）



SI1008 + SK1014 完掘（南方から）



SI1009 完掘（東方から）



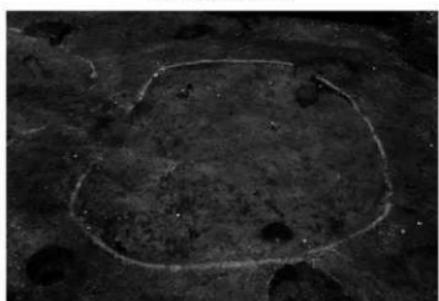
SI1010 完掘（北方から）



SI1011 完掘（南方から）



SI1011 炉跡セクション（南方から）



SX1001 完掘（南方から）



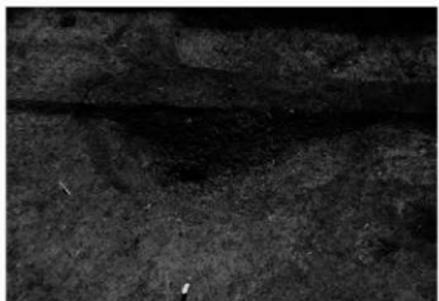
SX1001 セクション及びプラン



SX1002 完掘（東方から）



SI1009・1011・1008（手前から）と現地打ち合わせ



SK1014 南北セクション (東方から)



P1041 セクション (東方から)



P1025 セクション (西方から)



P1025 根固めの状況 (西方から)



フレイク集中出土状況



SS1015 セクション (西方から)



SS1016 セクション (西方から)



SS1017 出土状況 (北方から)



SB66 完掘（東方から）



SI67 完掘（東方から）



SI67 遺物出土状況（南方から）



SI67 南北セクション（西方から）



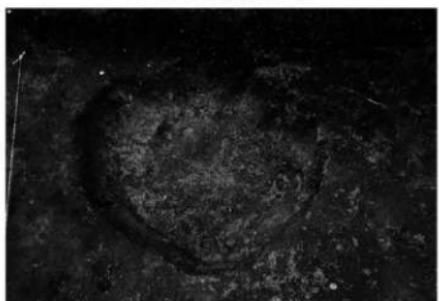
SI67 土器出土状況（西方から）



SI67 石器出土状況（西方から）



SI67 炉セクション（東方から）



SK68 完掘（北方から）



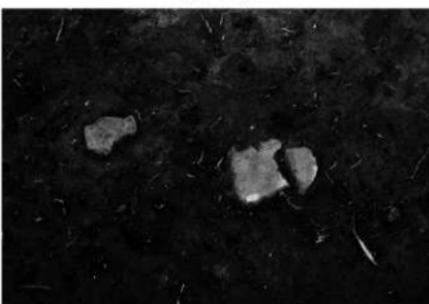
SK68 セクション（北方から）



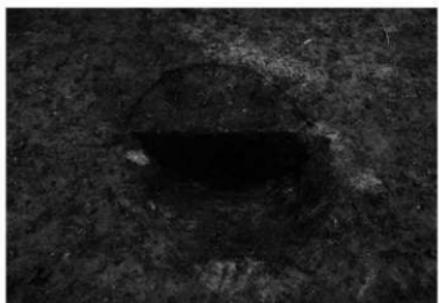
SK69 完掘（西方から）



SK69 セクション（北東から）



OW20 区（SK69周辺）石製品出土状況（西方から）



P89 セクション（南方から）



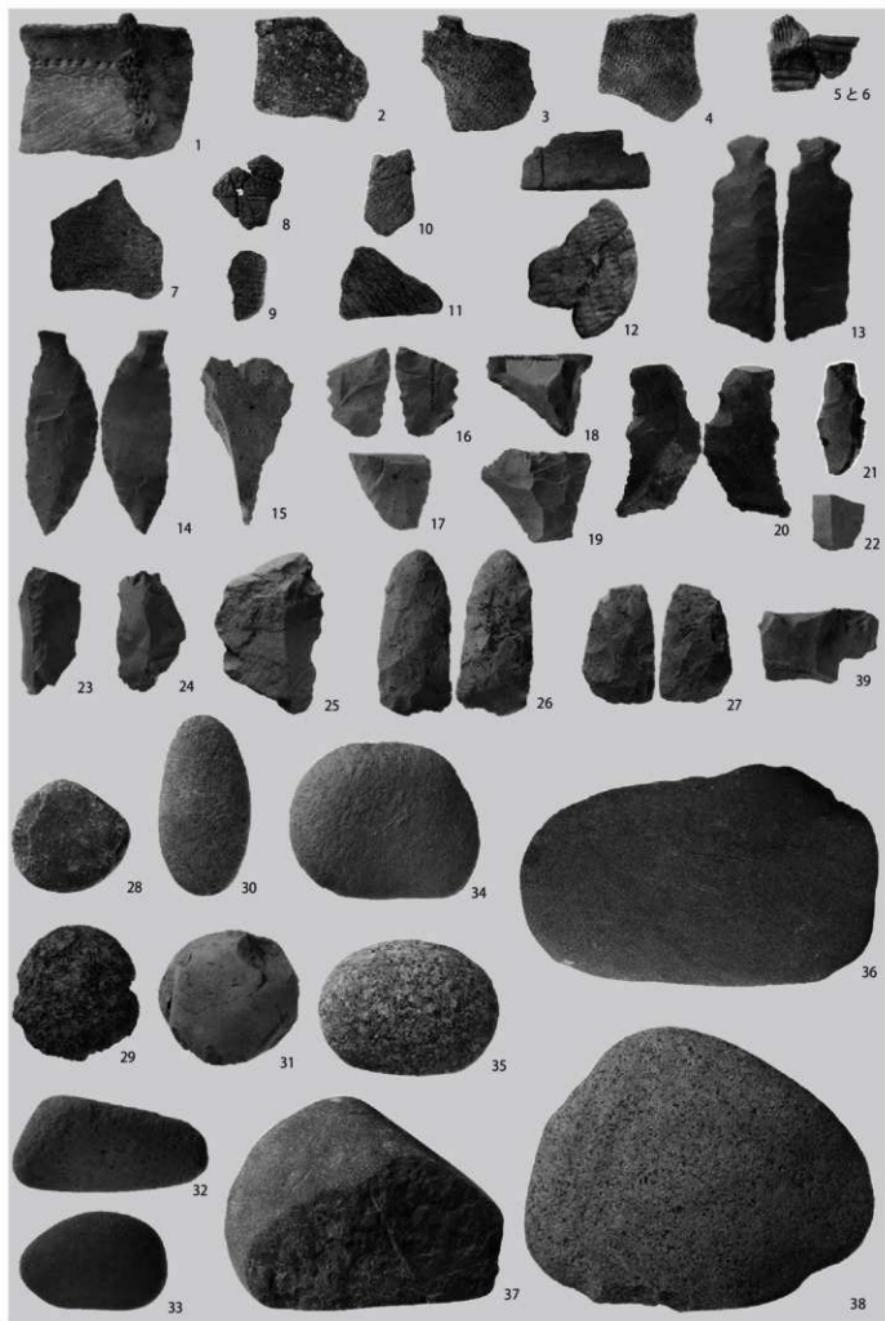
P89 碾出土状況（西方から）

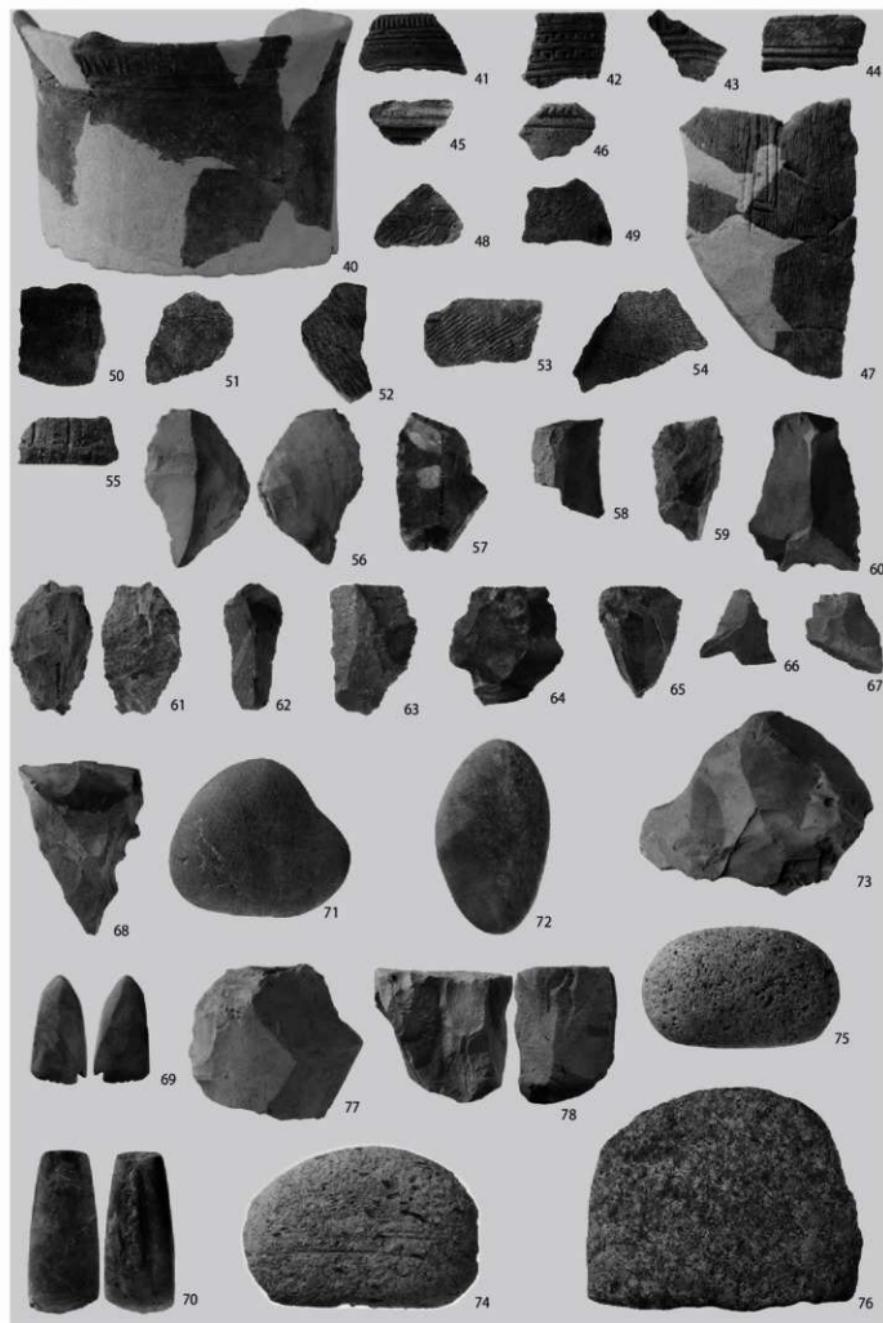


焼土 1 セクション（西方から）



上層完掘（西方から）







79



80



81



82



83



84



85

0

(79~84・86)

10cm (1:2)

0

(85)

15cm (1:3)

報告書抄録

ふりがな	おおさかうえみちいせき						
書名	大坂上道遺跡Ⅲ						
副書名	一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書						
巻次	V						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第235集						
編著者名	田海義正(理文事業団) 藤田登(株式会社 古田編)						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	2012(平成24)年3月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
新潟市秋葉区金津93番地1 大坂上道遺跡	新潟県東蒲原郡阿賀町大学西字大坂上道 西1827番地	15385	33 40分 46秒	37度 25分 47秒	2011.05.09 ~ 2011.06.22	320 m ²	一般国道49号 揚川改良工事
所収遺跡	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大坂上道遺跡	集落跡	縄文時代 前期～中期	竪穴住居7 竪穴様遺構2 土坑3 掘立柱建物2 集石遺構6 焼土2	縄文土器、石器(石匙・石鍬・ 不定形石器・石核・石皿・磨石 類)、石製品(三角形岩版)	小規模集落		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第235集	
一般国道49号揚川下改良関係発掘調査報告書V	
大坂上道遺跡Ⅲ	
2012年3月29日印刷 2012年3月30日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025(285)5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250(25)3981 FAX 0250(25)3986 URL http://www.maibun.net 印刷・製本 株式会社ハイングラフ 〒950-2022 新潟市西区小針1丁目 11番号 電話 025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第235集『大坂上道遺跡Ⅲ』 正誤表追加 2021年11月追加

	位置	誤	正
図版31	上から1段目	8 0	8 2
図版31	上から3段目	8 1	8 0
図版31	上から3段目	8 2	8 1

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第235集『大坂上道遺跡Ⅲ』 正誤表

頁・行	誤	正
p 12・3	部名	部分
p 13・29	SI1010	SX1001
p 14・20	87.3~87.3m	87.3~87.4m
奥付・2	揚川下改良	揚川改良